
白紙の物語

彼ノ岸 萩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白紙の物語

【Nコード】

N3778F

【作者名】

彼ノ岸 萩

【あらすじ】

一人の少女が記す、皆と出会ってから今に至るまでの切なくも愛情溢れる物語。あなたはこの物語の終焉を想像できますか？ 和風長編ファンタジーで、私なりに本格派を追求した作品です。あなたに此の物語を……。

悪夢 へ過去を記さむ（前書き）

この小説の題名はまだ決まっておりません。

また、この物語には難読漢字や造語が多く含まれているため、PC
でお読み頂くことをお勧めします。

どうか、ご了承下さいますようお願い申し上げます。

悪夢 〈過去を記さむ〉

「ハア、ハア……」

その娘はいつも、この世界では息を切らしながら走っていた。

「誰か……助けて……」

後ろからは、獣とも知れぬ異形を成したモノが闇の中から追いかけてくる。

> もう、走れない…… <

娘の足が少しずつ力を失っていく。

そして……。

「うつ、ぐっ……」

得体の知れない力が娘の心の臓を締め付けていた。

娘は苦しそうに声を上げ、衣の上から胸元を押さえ付ける。

だが、その行動もむなしく、やがて、娘の腕が力なく垂れ下がった。

*

「ハア……ハア……また、同じ夢……」

> 最近^{いふか}は、いつも同じ夢を見る <

娘は少し訝^{いふか}し気な表情を浮かべて、額に少し浮いている汗を近くに置いてあつた麻織^{あさおり}で拭くと、夜具からゆっくりと出てきた。

そして、夜具を丁寧に畳み、部屋の隅に寄せると、娘は隣の襖障子^{ふすましょうじ}を開ける。途端に朝日が差し込んできたが、娘は眩しそうにしながらも妻戸^{つまで}を開け、外に出た。

「姫様、お目覚めだったのですね」

橋廊^{はしろう}を渡る娘の後ろから、よく通る男の声が呼び掛けた。

「はい、今」

娘がその声に応じる。

「そうですか。姫様、それで、どちらへ？」

よく見ると、男の左腕辺りの衣は窪くぼんでいて、そこにあるはずの左腕がなかった。

「ちよつと、部屋で書を書くと思っているの」

「書……ですか？」

男が首を傾かしげた。

「そうよ。言っておくけど、中身はまだ秘密よ」

「承知しました。では、あまり無理をなさらないで下さいね」
頭を下げて、男が言った。

「あなたも、ね」

部屋はしんと静まり返っており、畳に使われている蘭草いぐさの香りや、二階棚の上に置いてある鏡箱かがみばこ、火取香炉ひとりくろうなどが、なんとも爽やかで霽はれの気きでその部屋を優しく包み込んでいる。

また、それと同時にそこが女性の部屋だということも、その部屋に置いてあるいくつかの家具から知ることができた。

すると、その静かな部屋に一人の着物を着た二十ほどのあの娘が、襖障子ふすまを開けて入ってきた。

娘は静かに、文机ぶんぐいの上に綺麗きれいに置いてある筆を手にとると、姿勢を正して邪魔になる着物の袖そでを捲まくし上げ、しわのない純白の和紙の右下に、こう小さく記した。

紗无

娘の書くその字は、達筆でとても美しかった。

その娘の名は紗无やな。紗无は静かに一息をすると、何かを考えだす。そして、その状態のまま二つが経とうとした時、紗无は何かを決心したように和紙に目を戻した。

どうやら、紗无は今から書こうとしている話の表題が決まらなかった。

たようだ。

そして紗无は、この時このようなことを思っていた。

*

私は、皆に聞いたことと、自らが体験した出来事をこの書に記すのだけど、私の聞いていない知らない場所で、世界がどう動いていたのかは定かではない。

だけど、ここには私が知るだけの全てのことを記そう。

今から私が記すのは、私と、私の周りの人々が、出会って、そして今に繋がる……。

それまでのお話……。

序章

あの日、私は……
私は死んだんだ……。

＊

気高くきよらに、さとにほふ心地して、春の曙の霞の間より、おも
しろき樺桜の咲き乱れたるを見る心地す。

「源氏物語・野分」より

＊

当時紗无は、その歳に合わせぬ大人顔負けの気品と、その歳相応の無
邪気さとを、両方同じくらい併せ持った元気の良い娘だった。
彼女の容姿は、淡い紺の衣に長く美しい少し青みがかった黒髪を無
造作に垂らして、顔は綺麗に整っており、凜としていた。
そして、その瞳は鮮やかな藍色を宿していた。

紗无は誰から見ても美しく見えただろうし、人によっては高貴な家
系のお嬢様にも見えただろう。

それほどまでに彼女は美しく、際立って見えた。

この頃、葦原の中つ国、日本国は小さな汎はんといういくつもの土地か
ら成っていて、紗无が育ったのはその日本国の中にある緋綉ひしゅうという
汎の、中でも裕福な家系の側にあったここ、珙琅ほうろう帷かきである。

だが、彼女の育った家系珙琅帷と、もう一つの家系與咲みよ風ふうの、因果
を巡る小競り合いこせりあひが生んだ悲しい出来事は、無情にもそんな紗无を
暗い世界に引きずり込んでいったのであった……。

そして、その悲しい出来事が、紗无さむというまだ幼い一人の少女と、
緋綉ひしゅうを含むいくつもの汎の運命の螺旋らせんを、大きく揺るがすこととな
る。

一章 闇に吞まれし青年 其ノ壱 彼の人

その出来事を語るには、これまでの歳月を遡^{さかのぼ}る必要がある。

紗无はその出来事を振り返る度に、胸を切り裂かれるような苦しみに苛^{さいな}まれた。

あの当時、紗无はまだ齡^{よわい}八歳ほどの幼い面影を残した少女で、その頃紗无は、限られた者との面識しかなく、外の事など何一つ知らないほどの、言わば箱入り娘であつた。

そんな紗无の面前に、ある日、叉^{さが}牙と名乗る青年が現れた。

その青年は、紗无に沢山の事を教えてくれた。外の町並みや町の人々のこと、町に売っている美味しい食べ物のことや、ここに来るまでの旅の話。その話の数々は紗无の心をとてワクワクさせるものばかりだつた。

だから、紗无は叉牙のことが好きだつたし、いつもそれらの話を楽しみにしていた。

だが、紗无は叉牙のことで一つ、気に掛かっていることがあつた。それは、当時の紗无にもはっきりと分かるほどの大きな変化である。そして、紗无はその変化が日に日に歴然としてくることが心配でならなかつた。その変化とは、1日が経つ度に、叉牙の影が薄くなっているということであつた。

＊

時々、紗无は向かいの橋廊を渡る叉牙をただただ眺めて

> やつぱり、叉牙は薄い水色が元の着物がよく似合うわねく

と、誰に聞かせるわけでもなく心の中で呟いていた。

叉牙はいつも、しっかりと着物を羽織り、しわなどの汚れは全くと言っていいほど見当たらなかつた。

すると、紗无の視線を感じ取ったのであろう。叉牙が紗无の方にゆつくりと顔を回し、黒に近い、所々に藍を散らしているその瞳に紗无を写して、軽く会釈をした。

そしてまたゆつくりと歩きだし、見ていた橋廊から去ってく。

それを見送った紗无は、はあとため息をついた。

それは、紗无には少し複雑な、叉牙が屋敷の女たちにもよく話し掛けられるくらいの優しい青年で、その現実が紗无の周りを取り巻いていたからに他ならなかった。

初めは、他の人より異常なまでに淡い藍色に染まった髪や、いつも包帯で隠されているその右目が、給仕の女たちや紗无の身近にいる人の陰口の対象となっていた。

しかし、そんな叉牙を唯一紗无だけが、兄に遊んでもらうようにとてもなっているのであった。

だが、叉牙は陰口など少しも気に止めていなかった為、その自然な振る舞いと、元々身に染み込んでいたのか、誰もが重宝するその礼儀正しさや、何でもできるのではないかと思わせる運動神経が、いつの間にかそんな周りの人からも愛される人物にしていたのである。相変わらず、叉牙の影が薄くなっていく現象に変わりはないのだが

……。

一章 闇に吞まれし青年 其ノ式 始氷祭り

季節は冬の上旬。

この頃になると、珙琅轡の本家がある緋綉ひしゅうの汎はんは大勢の人で賑にぎわう。それは、神無月かんなつきに始氷祭りしひょうまつりというこの汎を中心に大きな祭りが取り行われるからであつた。

そして、その祭りにより一層人々の目を惹くのが、この祭り独自の《射璽さじ》という流鏑馬やぶさめの会である。

この会は、基本的に他の汎からの参加もできるため、毎年たくさん、腕に自信のある者が参加する。残念ながら女の参加はできないのだが、それでも紗无には、湊蛇良またりと叉牙が活躍するだけで十分だつた。

湊蛇良とは、紗无が生まれた時からずっと、紗无の護衛士兼従者けんじゅうとして今まで紗无の側にいた人物である。

湊蛇良は背が高く、少なくとも町に出ればその姿は抜きん出ていただろう。

湊蛇良の特徴と言えば、その両手にいつもはめられている漆黒てっくの手甲こう。

また、後ろに撫で付けられた深い緑の髪を後方で細く結んでいることや、瞳は狼のように鋭く、絳あかを湛えているということが挙げられた。

だが、紗无はその瞳には、鋭さ以上に深い愛情や優しさといったモノがいつも宿っていることを知っていた。

そして、湊蛇良は去年の射璽はしやの覇者でもある。

その湊蛇良と、叉牙がどれだけやり合えるのかは分からないが、紗无はその二人ともを応援していた。

射璽の会は、犬追物いぬおうもの、笠懸かさかけ、流鏑馬の三つから成っていて、この三つを総じて騎射三物きしゃみつものと言う。

そして、参加する者はこの三つの競り合いで最も多く点を取ると、射璽の覇者となることができる。

耳を澄ますと、辺りからはもうすぐ射璽が始まるということもあって、既に今年の射璽の覇者が誰になるのだろうという話で持ちきりになっていた。

そして、そこには勿論、湊蛇良や又牙の名も少なからず挙げられていた。

*

弓矢とる 人を守りの八幡山 はちまんやま

誓いは深き 石清水かな

「八幡愚童訓」より

*

「きつと今年も、湊蛇良様がお勝ちになるわ」

「いいえ、今年は又牙様がいらっしゃるのよ？ そう簡単には湊蛇

良様も覇者にはなれないわよ」

そんな話し声もたくさん聞こえてくる。

それらの話し合いに聞き入っていた紗无の下へ、その噂の二人がやってきた。

「姫様」

「姫」

二人に呼ばれて、紗无はその声のする方を振り返った。

「湊蛇良！ 又牙！ 調子はどう？ 周りは二人の話でいっぱいよ！」

その無邪気な声に二人は顔を合わせて微笑むと、先に湊蛇良が紗无の前へ出て片膝をつき、言葉を紡いだ。

「姫様、ご心配下さり有り難うございます。この湊蛇良、姫様の護衛士の名に恥じぬよう、この身に誓い申し上げます」

次に、又牙も紗无の前へ出て、湊蛇良の横に片膝をつくど、同じように言葉を紡いだ。

「この又牙も、姫のお心にお応えしますことを、我が身に誓い申し

上げます」

二人が誓いを立て終わると、紗无は二人に向かって笑顔を向けて言った。

「二人共、頑張つてね。応援しているわ」

それを聞いた二人は、紗无に一礼すると、馬場へと向かって歩いていった。

そして、一つほどの時が経つと、周りが一気にざわめきたつた。

どうやら、お待ちかねの射璽が始まつたようだ。

紗无は急いで馬場全体が見渡せて、二人の姿が見える場所を探す。

だが、紗无はこの汎はんの第式姫君であるため、見晴らしが良く二人が見える場所という条件でも、難なく見つけることができた。

そこは、文字どおり馬場全体が見渡せて、すぐ下に参加者が見える場所である。

そして、紗无は馬場に入ってくるその二人を見つけた。

最初の競技は犬追物である。

犬追物では馬場の広さは四十間けん四方のものを三つ使い、その一つずつに参加者約六十人の内の二十人が入る。そして、百匹の犬を犬射いぬうつ引目ちひきめという犬を傷つけないような特殊な鎗矢かぶらやを使って射つのである。そこで、どれだけの点数を取れるかで勝敗を決める。

やがて、始まりを告げる甲高い笛の音が馬場全体に響き渡り、いよいよ射璽の競技の一つ、犬追物が始まつた。

一斉に参加者が馬場に入つて、それぞれが犬を射つ。

その中に湍蛇良と叉牙の姿もあつた。

さすがの二人は見事に馬を操り、次々に犬を射ち点数を上げていく。他の汎から来ている者も良い腕の持ち主ではあつたが、その二人はそれ以上のものであつた。

やがて半刻が経つて、終わりを告げる笛が鳴り、二人は共に三十点

で同点。

その他の参加者は十点ほどであった。

そして、ここで一番目に点数が高かった者と二番目に点数が高かった者が、次の笠懸に出場することができる。

今回のこの馬場では、一番点数が高かった者が二人いたため、清蛇良と叉牙が次の笠懸に出場することができた。

そして、休む暇もなく次の笠懸が始まる。

この射撃では、休む時間がないため、参加者の体力も問われるのだ。始まりの笛が鳴り、犬追物で勝ち残った、一の馬場から二人、二の馬場から二人、三の馬場から二人の合計六人が笠懸を行う馬場へと入ってくる。

笠懸とは、基本的には流鏑馬と変わりはないのだが、馬の走れる区間が流鏑馬では二町なのに対して、笠懸では一町と流鏑馬の半分にまで短くなっている。

また、標的が多彩であり、流鏑馬より実践的なのだ。

そのため、ここではより実践的な実力が試されるのである。

今回の的は、円的に空けられた直径一寸ほどのやつのことで矢が通るくらいの穴に、走る馬の上から矢を通すというものだった。

それを見た観衆は

「本当にあんな小さな穴に通せるのか？」

と、懐疑の念を口にしていたが、そんな中でいつも清蛇良と叉牙の弓の練習を見ていた紗无だけは、あの二人ならできると確信していた。

そして、一人目の参加者を乗せた馬が走りだす。

観衆は息を飲んでそれを見守った。

しばらくの沈黙の後、矢が的に当たった鈍い音がした。

観衆から

「やっぱり無理なんじゃないのか？」

という声があちらこちらから聞こえてきた。

そう。初めに笠懸をした参加者は、矢を穴に通すことができなかつ

たのである。

そんな落胆の観衆の中、次に笠懸をするのは湊蛇良だ。それを見た観衆の中で、一部が周りと違う意味でざわめいた。

「湊蛇良様だわ！」

「湊蛇良様なら必ずご成功させて下さるわ！」

なんとそれは、湊蛇良にいつも構ってもらおうとしている健気な若い女の者たちであつた。

そんな声援にも湊蛇良は優しく微笑み掛ける。

女たちはそれを見ると、先ほどよりも一層ざわめきたつた。

そして遂に湊蛇良を乗せた馬が走りだす。

湊蛇良の顔は真剣そのものだ。

その証拠に、二つの鋭く紅く光る眼光は、しっかりとその穴を捉えていた。

一瞬の沈黙がその場を制す。

一迅の鋭い風が、周りに吹き渡つたように感じた。

そして次の瞬間には、その沈黙は歓声へと変わっていた。

紗无の口からも自然と笑みがこぼれる。

湊蛇良は見事にそのわずかな穴に矢を通したのだ。

盛大な歓声が少しずつ納まってきて、次の参加者が馬場に入る。

しかし、その参加者も次の参加者も、遂には三人が、穴を通すことができずに馬場を後にした。

そして最後は又牙である。

最後の参加者とあつて、場の空気は張り詰めついた。

このとき皆は一瞬でも、この射撃の覇者はこのまま湊蛇良になるのではないのかという思いが頭を掠めたことだろう。

そして、その沈黙を破って又牙を乗せた馬が遂に走り出した。

又牙を乗せた馬がどんだ的に近づいていく。

又牙が矢を離れた瞬間、紗无は思わず目を瞑^{つむ}ってしまった。

何も音が聞こえない。

紗无は恐る恐る目を開いた。

そこには、こちらを見て優しく微笑む又牙の顔があった。

又牙は矢を穴へ通すことができたのだ。

観衆が一気にどよめいた。

ここで又牙が失敗してしまつたら、観衆は流鏑馬を見ることができなかつたのだ。

そのため、観衆のどよめきは、それは凄いものだった。

そして最後に残るは、待ち焦がれていた流鏑馬である。

ここではこれまでの競技での疲労と、笠懸で削られた精神力との戦いになる。

流鏑馬で当たる二人は、少なからず汗をかいていた。

馬場を走るの一回だけ。

そこでどれだけ、射た矢を的の中心に近付けれるかが勝敗を決める。最初に走るのは湊蛇良だ。

湊蛇良は静かに息を整え、馬にまたがる。

そして馬を走らせた。

湊蛇良が弓を構える。

紗无はそれを、手を握りしめ、息を詰めながら見守っていた。

そして、その時は一瞬だった……。

湊蛇良の射た矢が、完全に的の中心に突き刺さった。

観衆から大きな声が上がリ、湊蛇良は汗を流しながらも微笑を浮かべて馬場を去った。

それを近くでしっかりと見ていた又牙は、少し笑みを浮かべた。

次は又牙の番である。

又牙はさつきとは違って、いたって平常であつた。

又牙が馬にまたがり、優しく馬のたてがみを撫でる。

そして馬は走り出した。

驚くべき速さである。まるで風のように走る馬を手綱一本で操り、又牙の左目の眼光が鋭さを増したかと思うと、その時には的を通り過ぎていた。

そして的をよく見ると、そこには確かに、又牙の射た矢が見事中心

に刺さっていた。

一時は皆、何が起こったのか分からず、まるで音を奪われたかのように、ただ呆然とその的を見ていたが、その沈黙はほんの数秒だけだった。

その沈黙はやがて、これまでにない歓声へと変わった。

この勝敗は誰にも付けられない。

そのため、この射撃の覇者に贈られるはずであった白鷺つばなぎの弓は、二人の意思で琺琅ほうろうかく轡が貰い受けることとなったのであった。

二人が疲れた表情で紗无の前に立った時、紗无は明るく優しい笑顔で出迎えた。

「清蛇良、叉牙、二人ともとても格好良かったわ。私、今とっても幸せよ」

その笑顔を見た二人は、紗无に向かって口を揃えて言った。

「有り難きお言葉……」

その和やかな時分に、叉牙の影の薄さが増したのに気付いていたのは、叉牙本人だけであつた……。

一章 闇に吞まれし青年 其ノ参 彼の人が消えし時、コトが始まる

それから二年が経ったある日のこと――

紗无は一度、彼にその影のコトについて聞いてみたことがある。

叉牙は、その紗无の話を、最後まで何も言わず静かに聞いてくれた話を聞き終わって、叉牙は少しの間、黙って目を閉じていた。

そして、戌いぬ二つを過ぎようとした頃、叉牙は固く閉じていた口をゆつくりとした動きで開いたのであった。

「昔私は、私の主であるお方に、ある人を守るための力と共に、呪いを受けました……。」

その呪いは、決して外すことなどできない強力な呪いです。

無理にその呪いを外そうとするなら、私は一瞬でこの世から排除されることでしょう。

それほどまでに、あのお方の力は強大です」

「そんな呪いを受けるのに……どうして叉牙は力を欲したの！？どうして！？」

紗无はせがむ様に尋ねた。

「私には、どうしても守りたい人がいたのです。そのためには、その人を守るためには、主様からのお力添えなくしては叶わなかったことなのです」

そう答えた叉牙の声は、どこまでも澄んでいて、真っ直ぐな声だった。

しかし、紗无はその声の中に少し、悲しいような寂しいような、何か暗い音を確かに聞いたのであった。

そして、その音はまるで水面にできた波紋が周りに広がっていくように、叉牙を少しずつ変えていった……。

ある日の朝、紗无が着物に着替えて寢床から出てきた時、丁度又牙と鉢合わせたことがある。

紗无はこんなことは初めてだなと思いながらも、又牙に向かって

「おはよう。又牙」

と声を掛けた。

紗无が疑問に思うのも無理はなく、いつもなら又牙は、屋敷の奥の朝餉あさけの場である楼ろうの間で、毎朝顔を合わせるのが普通であった。

だが、今朝に限っては目の前にその又牙がいるのだ。

それも、又牙の様子が妙なのである。

挨拶をしたのに、返事が返って来ない。

それどころか、又牙の目は虚ろで、どこか明後日の方向を見つめている。

そして、紗无は大きな変化を見つけてしまった。

紗无はその変化を見て、恐怖に身を震わせた。

又牙の影のほとんどが、消え失せてしまっている。

「又牙！！」

紗无は思わず彼の名を叫び、手をとった。

すると、彼はゆっくりと紗无の方を振り向いた……かと思うと、目を大きく見開き

「姫！！ 来ては駄目だ！！」

と叫ぶや、紗无を橋廊はしろうの上に突き飛ばした。

すると次の瞬間、又牙の立っている位置に影よりも深い、黒い円が現れ、又牙を一瞬の内に呑み込んでしまった。

紗无は何が起こったのか理解できず、少しの間、今しがた又牙が立っていた橋廊の一部を見ていたが、やがて大粒の涙が紗无の頬を伝い落ちた。

そして、もう一度彼の名を声の限り叫んだ……。

——その叫びが屋敷中に響いた時、屋敷内ではまた、他の闇がその身体からだを動かし始めていた……。

二章 從者へ運命 其ノ巻 コトの最中（前書き）

運命〓さだめ
最中〓さなか
と読みます。

二章 従者へ運命 其ノ壱 コトの最中

どのくらいの間、その場で泣いていただろう……。

長い間泣いていたためか、さつきまでとても静かであった屋敷が、何か騒々しい雰囲気を漂わせていることに、紗无はやつと気付いた。辺りから、たくさんの人の声や足音がする。それらの音は何か良くないものを紗无に感じさせた。

やがて、その予感^{予感}は紗无の感じた通りになった。

「姫様！！ ご無事だったのですか！！」

「は、はい。清蛇良^{またら}、この騒ぎはなんなの？」

清蛇良は護衛士のため、その衣は普通のものよりも丈夫に出来ていて、動きやすいものになっていた。

その証拠に、衣の袖の裏側には、細かい網目模様の金属が備わっている。

その他にも、衣に使われている絹は上等なもので、とても軽い加工の上、その刺繍^{ししゅう}には術への耐性の呪い^{まじな}もしてあるそうだ。

また、清蛇良の刺繍は緑のものが多く、それは山の自然から取ったものが幾多に使われているからである。

これも、自然からの守護を受けるためのものであった。

「姫様、落ち着いて聞いて下さい。今しがた、この屋敷に火を放つて逃亡した者がいるのです」

それを聞いた紗无は、背中の毛が一気に総毛立つのを感じた。

紗无の心の中に、一人の人間の姿が浮かんだからである。

「その者は、第参^{さん}姫君の沙史^{さし}様を手に掛け、紗无様の兄上の一人、狩李^{しゆり}様に深手を負わせました。

その他にも、侍女や庭師^{ていし}、護衛士までが手に掛けられています。

また、既に屋敷の廁^{かわや}から湯の間までが焼け落ちています」

「そんな……！」

紗无が思わず呟いた。

「コトを起こしたのは……逃亡したのは……又牙です」

湊蛇良が口にした名前を聞いて、紗无は愕然とした。

又牙が……どうして……。

紗无は、今はいない又牙に問うように、心の中で呟いた……。

「とにかく、この場は危険です。いったん安全な場所に移動しましょう」

湊蛇良は、自分が守るべき人に向かってそう言った。

だが紗无は、何故又牙がこのようなことをしたのか理解できず、ただ呆然と座り尽くしていた。

「姫様！！ 早くおいで下さい！！ 姫様！！」

湊蛇良は叫んだ。

しかし、紗无は少しも動く気配がない。

それを見た湊蛇良は、意を決して

「姫様、ご無礼をお許し下さい」

と言うや、紗无を担ぐように肩に乗せ、屋敷の外へ向かって走った。紗无の寢床の脇を擦り抜け、屋敷の庭を、砂利を散らしながら堀へ向かって跳んだ。

二章 従者へ運命 其ノ式 攻防

屋敷を脱出して、湊蛇良は紗无を担ぎながら屋敷から少し離れた森の中を走っていた。

森の中は朝方であるというのに少し薄暗く、不気味に鳥の鳴き声や獣の草を揺らす音などが聞こえている。

湊蛇良は護衛士として、術の類も心得ていた。

そのため、この時湊蛇良は霄駆の術を使って、すぐに遠くへ移動することもできたのである。

しかし、湊蛇良はいつも、少しでも危険を避けるために、守護の術を使ってから霄駆の術を使うようにしている。

だがこの時、湊蛇良は敵が自分たちを追って来ていることにも気付いていた。

そして、湊蛇良は自分が霄駆の術を唱え終えるまでに、自分の守護の術が保ってくれるのか、心許ないのであった。

だから、湊蛇良は霄駆の術を使いたいにも使えないでいたのだ。

それに、いつ新手が前方から現れるか分からない今、ましてや紗无姫にそんな危険を負わせるわけにはいかない。

その時、湊蛇良はつくづく自分の勘の鋭さを恨んだ。

湊蛇良の予感案の定、彼が思った通りになった。

前方から、何人かの敵の新手が現れたのである。

湊蛇良はこの、自分の勘の鋭さにいつも助けられてきた。それは、今回も例外ではない。

そのため、この時も湊蛇良は既に、片手に収まるだけの札を携えていたのである。

そして、前方の新手の中の一人が、二人に向かって飛び掛かってき

た。

それを確認した湊蛇良は、手に持っていた札を一枚、相手に向かって飛ばした。

その札は一直線に相手に向かって飛び、敵方の腹部に貼り付く。

その瞬間、湊蛇良は術を唱えた。

「全てを焼き付くさんとする魔の焰^{ほのお}よ。我を守り、彼の者^かを焼き払え」

そして、術を唱え終えた瞬間、敵の周りに黒々とした炎が立ち上り、やがて敵を呑み込んでしまった。

それを見た追手たちは、二人を中心に囲むようにして、間合いを取りながら様子を見る。

湊蛇良はその追手たちに呆れたように

「どうした？ 怖^おじ氣付いたのか？」

と、一言言った。

そして、それが合図であつたかのように、追手たちが一気に飛び掛かってきた。

湊蛇良に向かっていくつも的小刀が飛んでくる。

だが、湊蛇良はそれらの小刀を避^よけようとせず、ただその場に立

つて一言

「水守^{みなもり}」

と唱えた。

その瞬間、二人の周りに二人を囲むようにして水壁^{すいへき}が出現する。

そして、その水壁は飛んできた全ての小刀を受け止めてしまった。

それを、湊蛇良は満足気に眺め、次に

「回^{かい}」

と呟いた。

すると、水壁に止められていた全ての小刀が向きを変え、敵に向かって跳ね返っていったのである。

その思わぬ反撃に、いくらかの追手は倒れた。

しかし……

「やはり、全ては殺れなかつたか……」

湊蛇良は少しも残念がらずに呟いた。

そして、残っていた数えるほどの人数の追手が、今度はその手に武器を持って、一気に二人に向かって飛び掛かってきた。

それを見た湊蛇良は、手に持っていた残りの全ての札を敵に向かって飛ばす。

そして、湊蛇良は一番の頃合いを見定め

「魔焰まえん」

と言い放った。

その瞬間、敵の足下に落ちた札から火柱が上がり、敵を一気に呑み込んだ。

それを確認した湊蛇良は

「ふう。これで片付いたかな」

と、安堵の声を漏らした。

すると、火の手の方から

「何が片付いたって？」

と、低い声が響いた。

その瞬間、火柱の一部が一瞬煌めいたかと思うと、火柱の中から一本の小刀が湊蛇良目がけて一直線に飛んできた。

だが、湊蛇良は見向きもせず……

「何がって、敵が片付いたに決まってるだろ？」
と言った。

そして、湊蛇良の背中に小刀が突き刺さろうとするその瞬間、湊蛇良の周りを黒々とした炎が包み込んだ。

飛んできた小刀は焼け落ち、地面には炭だけが残った。

「ふん、言ってる。」

だが、これでお前は札がない以上、もう術は使えない。
こちらの勝ちだ。どっちが片付いたか思い知れ！」

それを聞いていた湊蛇良は、やはり余裕を含んだ声で

「いや、片付いたよ」

と言った。

そして、相手の足と【下に落ちていた札】の擦れ合う音を確認して
「魔焰」

と呟いた。

次の瞬間、屋敷から離れた山の中に、大きな火柱と一人の人間の断
末魔の叫びが高く上がり、叫び声は山々に^{こだま}飢して、やがて消えた…
…。

二章 従者へ運命 其ノ参 信じる者

森を抜け、湊蛇良は近くの、昔に瑠琅輦ろうろうかんが建てたとされている小屋に向かった。

あれから敵の追手の気配はない。初めの難関は突破しただろう。そして、次に大変なのは紗无姫のことである。

屋敷を脱出してから今まで、紗无姫から反応が全くない。

湊蛇良は焦っていた。

小さいが、必要なものはある程度揃っているこの小屋が、湊蛇良には何よりの救いであった。

――まず、姫様の心にある傷を和らげなければならない。

そのためには、湊蛇良が、少しでも紗无に救いがあることを気付かせなければならなかった。

「姫様……。聞こえますか？」

湊蛇良は囁いた。

だが、紗无に反応はない。

「姫様。よく聞いて下さい。又牙さがは生きております……。

また、直接にあの事件を起こしたのは又牙ではありません。

あの時、又牙は何者かに操られているように見えました……」

湊蛇良がそう言うと、紗无は咳せき込むように尋ねた。

「それは本当！？　じゃあ、又牙が故意にしたことではないのね？」

「姫様、落ち着いて下さい。

確かに又牙はあの時、操られていました。

ですが、そうはいつでも、又牙が操られる隙を見せてしまったことに、違いはありません」

「そう……。ですね……。でも、又牙は闇に吞まれる時、私を助けてくれたわ……。その又牙の行為に、偽りはないと……。私は信じたい」

「ええ。姫様が信じてあげなければなりません。」

叉牙には、姫様に初めてお会いになった頃から、既に何か、危ういものがありました」

「ええ……そうね。ありがとう滑蛇良」

「いえ。私は、姫様の護衛士ですから」

三章 くコトの間に安穩な日々をく 其ノ巻 近況（前書き）

間〓あわい
と読みます。

三章 くコトの間に安穩な日々をく 其ノ巻 近況

小屋の周りには、盲目の結界が張られている。

この結界が張られている限り、相当のことがなければ敵は侵入できない。

相手にとつては、ただの平地が広がっているようにしか見えないだろう。

先ほど、仲間の者からの文も届いた。

「そういえば湊蛇良、母様や父様たちはどうなったの？ もちろん無事でいらつしやるのでしょう？」

紗无の質問に湊蛇良は少し戸惑ったが、紗无の質問から逃れることはできないと湊蛇良自身、重々承知していたのだろう。

やがて、湊蛇良は口を開いた。

「はい……。お二人とも、ご無事でいらつしやいます。

ですが、母君の由香璃様は左腕に軽い火傷、父君の雅湯来様は足に捻挫を負ってしまったようです。

第壱姫君の雪様は、何事もなくお逃げになられたようです」

「そう……。」

それは良かった」

紗无は、少し寂しげな表情で言った。

「姫様……沙曳様のことは、本当に心苦しく思います。

ですが、沙曳様のお命を無駄にしないためにも、姫様は生き延びなければなりません……」

「分かっています……でも、湊蛇良……では今から私は、どうすればいいの……？」

「……」

「湊蛇良！」

紗无が自分の前で俯く従者に向かって叫んだ。

紗无は、沙災が望むところへ逝ってしまったことへの遣る瀬無さをどこへやればいいのか分からなかった。

紗无の瞼の裏に、炎に包まれた屋敷の中で泣き続ける妹の姿が浮かぶ。

「今は……待つしかありません……。幸い、奇跡的に屋敷は全焼ではなかったそうです。ですから、私たちは屋敷が安全な状態であるという知らせがくるのを、ここで待つことが最良の処置でしょう」

湊蛇良が絞り出すように言った。

「それは、いつになるの？」

紗无は声を低くして聞く。

「おそらく……十年はかかるかと……」

「はあ。やはり、というところね……」

紗无は予想していたように溜め息をついた。

「すみません……」

「なぜ、湊蛇良が謝るの？」

「いえ、それは……」

湊蛇良が声を詰まらす。

「まあ今、あなたが待つしかないと言っのなら、待つしかないのでしょうかね……」

「はい……」

三章 くコトの間に安穩な日々をく 其ノ弐 回復

あれから十日が過ぎた。

幸い、あの出来事があった日から敵の干渉はなく、いたって平和な日々が続いた。

紗无は一才歳を加え、十一歳になった。

そして、今日もいつも通り、結界から出ないように注意しながら、二人は焚き火に使う薪を探していた。

季節はもう冬に入ろうかという頃で、少しずつ昼間の温度が低くなってきた。

「今日はこのくらいでいいでしょう。」

それに、もうすぐ日が暮れます。

夜は冷えますから、そろそろ火を焚いて、小屋を暖めておかなくては」

湊蛇良が紗无に声を掛けた。

「そうね。」

今日の夕餉は何にするの？」

紗无が興味津々に尋ねた。

「今日は姫様のお好きな鮎の塩焼きと、体の温まる山菜のお粥にしようと思っております」

「本当！！ じゃあ期待して待つてるわ」

「はい」

湊蛇良はあれから、少しでも紗无を元氣付けようと、生活面でも話の中でも工夫をするよう心掛けてきた。

その甲斐あって、紗无は少しずつ笑顔を見せるようになっていた。

「やっぱり、湊蛇良の作る料理は美味しいわね」

紗无が明るい声で言った。

「いえいえ。」

屋敷の御膳を担当している女たちには及びませんよ」

湍蛇良は答えた。

「そんなことないわ。」

湍蛇良の料理は絶品よ！　もっと自信を持っていいわ」

「有り難きお言葉」

湍蛇良はここ数日で、紗无が前のように明るく振る舞うようになってくれて、本当に良かったと感じた。

今の紗无を支えているのは、又牙が存在しているという希望があるからだ。

それ故に、紗无はこれほどまでに早い回復を見せたのだろう。

湍蛇良はその回復の、最初の一押しになったのだ。

その一押しがなければ、紗无は未だに、心の傷を癒せずにとただろ
う。

その心の傷の原因を瞬時に見抜き、湍蛇良は最良の手を打ったのだ。

夕餉を食べ終え、二人は広間でくつろいでいた。

だが、広間とはいっても、小屋の中にある以上、それは広間とはい
い難い質素な五畳ほどの部屋であった。

それ故に、どちらか一方が声を出せば、必ずと言っていいほど相手
に言葉が伝わるようになっていた。

「姫様」

湍蛇良が声を掛けた。

「どうしたの？」

「姫様に話したいことがあります……」。

いえ、姫様には知っておいて頂きたい」

湍蛇良がいつになく畏まった、神妙な面持ちで言った。

「分かったわ」

紗无も、それに応えるように真剣な顔つきになった。

「これは、昔から続いている琺琅^{ほうろう}櫃^{かく}と與咲^{よたけ}皿^{めい}の、長い小競^{こせ}り合いに

関する歴史です……」

一呼吸置き、滑蛇良はそう言って話を切り出した。

三章　くコトの間に安穩な日々を　其ノ参　二つの家系

——その昔、珙琅幬は今と同じように、広い領地を持っていました。そして、今の珙琅幬と対になる與咲風は、呪言じゅげんを扱う、つまり呪術を使うことで、大きな力を所持していました。

簡単に言いますと、二つの家系は両方とも、一方にないものを持っていた。

ですが、当時の二つの家系にはほとんど繋がりはありませんでした。なのに、何を思ったのか與咲風の呪者が、珙琅幬の屋敷の者の幾人かを呪い殺したのです。

その事態を知った、当時の珙琅幬の当主である朱狼様しゅうろうは、すぐさま與咲風の当主に宛てて文を書きました。

ですが、文の返事は来ず、事態は悪化の一方でした。

これ以上の死者を出すわけにはいかないと思ったのでしょう。

朱狼様は汎はんにその事態を報告しました。

そして、二つの家系に汎はんからじきじきに契ちがひが結ばれ、事態は終息の道に入りました。

その契は当然、先に仕掛けた與咲風に不利益なものとなりました。

契の内容は、珙琅幬に毎年、汎で定めた分の糧餉りょうこうを納めること。

そのため、珙琅幬から與咲風へ争いを起こすような接触は避さけること。

そして、この契が結ばれてから何年か年を重ねたある日のことです。朱狼様宛てに文が届きました。

そこには、與咲風当主からの脅迫と取れる内容の文章が、走り書きされていました。

それからというものの、今までも何度か、與咲風の方からの襲撃はありました。

ですが、こちらにも守護の術を心得ている者がいたため、なんとか大

事にはならずニコトを済ましていました。

それでも、死者は少なからず出ています。

朱狼様は死者が出たことで、與咲風を許すことができなかった。

そのため、朱狼様は文の脅迫の内容を受け入れず、また、與咲風からの襲撃も収まることはなかった。

そして、歳を取られていた朱狼様が亡くなられてしまった。

噂によると、與咲風の当主はまだ生きているという話です。

ですから、今も二つの家系の小競り合いは続いています。

與咲風当主からの文の内容は、領地をあちらに引き渡す、ということだったようです。

滑蛇良は話し終えると、火の小さくなつた焚き火に薪を焼くべた。

囲炉裏からパチパチと木炭が弾ける音がした。

「それじゃあ……私が知らないところで、珙琅幘の人が殺されてたつて言うの？」

「はい。仰る通りです。姫様のお近くの者では、給仕役を務めていた采女うねめが一人と、私と共に護衛士をしていた刈鬱かりぶさが敵の襲撃によって命を落としました。」

「そんな……」

滑蛇良から真実を聞いた紗无は、言葉を失った。

「どちらかの家系が手を引かない限り、二つの家系の争いは続くでしょう」

「私……初めてこんなに人を憎んだわ。たかが領地のために人を殺して……」

父様も父様だわ！！ 人が殺されるくらいなら、もっと……例えば與咲風と珙琅幘を繋げてしまつとか……」

「姫様。よく聞き下さい。」

姫様のお父上様、雅湯来まひゆき様の父に当たる方なのですよ。朱狼様は……

……」

「……」

「姫様がお父上様のようなご立場なら、そのようなコト、出来ますか？」

「……。」

でも、そんな……」

「すみません。」

言葉が過ぎました。お許し下さい」

「いいえ、いいのよ。本当のことだもの……。」

でも、それでも悲しすぎるわ……。そんなこと……」

「恐らく、雅湯来様はご自分の父が何もできずにお亡くなりになられて、それを簡単に覆^{くつがえ}してしまつては、父の死が何になるのか、とお考えになつたでしょう。姫様はお優しいんですね。そのお気持ち

を、いつまでもお持ちになつていて下さい。

ですから、姫様はそのお手を、決して汚してはなりませんよ」

滑蛇良が紗无の瞳をその深紅の瞳で見つめて言った。

「分かつたわ……。約束する……」

三章　くコトの間に安穩な日々を　其ノ肆　気晴らし

夜の森はとても静かだ。

何か、周りの音という音を全て吸い込んでしまっているかの如く、
本当の静けさに包まれる。

いつだったか母様に

「夜の森は、恐れる者には恐ろしいけれど、実際はとても美しいものなのよ」

と、言われたことがある。

その時、私は近くにできた自然の闇を指さして言った。

「母様。私、夜はあの黒いのがいっぱいに広がってくるから怖いわ」
それを聞いた母様は、微笑んで私に言った。

「紗无？　夜の森はね、しっかり目を開けて、そこに何かあるのかを見定めなくては駄目よ。」

紗无があれを怖いと思うのは、あそこに何か、得体の知れないモノがいると思うから。

何事でも、真実を確かめてみないと、本当に怖いかは分からないものよ」

「姫様？　姫様？　大丈夫ですか？」

紗无は目を開いて、自分を呼ぶ声の主ぬしを見た。

「肴・蛇・良？」

「はい。そうです。」

辺りを見回したが、まだ暗い闇が、辺りを覆い尽くしている。

まだ、夜中のようなだ。

そして、紗无は初めて、自分の頬を一粒の涙が伝っていることに気付いた。

「なんで私、泣いているのかしら……」

この、紗无の眩きは、余計に湍蛇良を心配にさせたようだった。

「どこか、お具合が悪いのですか？ お水をご用意致しましょうか？」

それを聞いた紗无は、慌てて湍蛇良を止めた。

「だ、大丈夫よ。湍蛇良、なんでもないわ」

その言葉を聞いた湍蛇良は、まだ心配そうな顔をしていたが、紗无が寝ている夜具やぐのところまで戻ってきて、隣に腰を落着けた。

それを確認した紗无は、枕に頭を預けたまま、眩くように言った。

「夢を見たの……。昔の……。私がまだ三歳か四歳だった時の……。母様と話をしていたわ」

「そうですか……」

湍蛇良は少し顔を暗くして応えた。

「湍蛇良、母様は今、どうされているのかしら」

紗无の質問に、湍蛇良は答えた。

「私たちとは違う所で、お元気にされておられますよ……」

「……」

「姫様……お母上様にお会いになりたい気持ちは、この湍蛇良も重々承知しております。」

ですが、どうかもう少しご辛抱下さい」

紗无は泣いていた。

その涙は、母に会えない悲しみからではなく、一瞬、母の存在を今ここにいないだけで、とても遠い存在だと感じたからだだった。

「姫様……どうか、今日はもうお休みになつて下さい。」

少しでも、刻ときが早く感じるように……」

紗无は、その言葉に吸い込まれるように、眠りに落ちていった。

「どうか、良い夢を——」

あれから、紗无は四日間泣き続けた。

食事もうくに喉を通らず、四日間の内口に入れたものというところ、湍蛇良が少しでも口に何か入れなければと森で取ってきた柔らかい

果物を水で流し込んだくらいだ。

「姫様。一度、気晴らしに外に出てみてはいかがですか？　いつも小屋の中では、お体にもよろしくないでしょうし……。一度、近く森に行つてはみませんか？」

「でも、それじゃあ結界の外に出てしまうのではないの？」

湊蛇良の提案に、紗无はもつともな疑問を口にした。

だが、紗无も一度はあの森を歩いてみたいとは思っていた。

その疑問に、湊蛇良は優しい声で答える。

「ご安心下さい。少しの間なら、私の盲目の術で姿を消して、森の中を歩くことができます」

「分かったわ。行きましょう」

紗无はそう答えたものの、まだ体が十分に回復していなかったため、湊蛇良に手を引いてもらう形になってしまった。

久しぶりに小屋の外に出た紗无は、外の空気を吸って、とても清々《さすが》しいと感じた。

それだけでも、紗无は外に出て良かったと思った。

近くの茂みから森の中に入り、二人は少しの間、無言で歩く。やがて、少し森が開けた場所に出て、二人は歩みを止めた。

「少し、休みましょうか」

湊蛇良の提案に、紗无は少し頷くことで肯定を示した。

そこは、風が吹き抜け冬の季節には少々肌寒いところではあったが、今の紗无にとっては心の霽ちやを一掃してくれるような、心地良さを感じさせるところであった。

そこで二人は、各々おのおのがしたいことをすることにした。

湊蛇良は、持ってきていた横笛で、どこか異国の曲を奏でていた。

紗无は、風にその長く美しい髪を遊ばせながら、その湊蛇良の奏でる曲に合わせて、昔母から教わった《卯月の舞うづき》を踊った。

四章 八百万の神く神契を交わす者く 其ノ壺 出会い（前書き）

八百万〃やおよろず
神契〃しんけい
と読みます。

四章 八百万の神と神契を交わす者、其ノ壱 出会い

曲が終わって、紗无は何をするでもなく、自然に身を委ねていた。
そして、紗无が何もしないまま、一刻ほどが過ぎた頃、湍蛇良は腰を浮かした。

「姫様、そろそろ小屋に戻りましょうか。私の術も、近いうちに綻びが生じるやもしれません」

「分かったわ。湍蛇良、今日はありがとう。とても良い気晴らしになったわ」

紗无が笑顔で湍蛇良に向かって言う。

「そうですか。それは良うございました。喜んで頂けて、私も嬉しゅうございます」

湍蛇良もそれに応えるように微笑みながら言った。

その後、二人は来た道とはまた違う道を使って、小屋まで戻ることにした。

「おかしいですね……」

帰路で、湍蛇良が微かに呟いた。

「どうしたの？ 道にでも迷った？」

紗无が心配そうに尋ねる。

「いえ、そうではありません」

湍蛇良の異変に気付いて、紗无はもう一度、次は声を潜めて尋ねた。

「どうしたの？」

「……」

湍蛇良は目に鋭さを宿しながら辺りに神経を注いでいる。

「湍蛇良？」

「姫様、周りを見て下さい。明らかに、辺りが暗くなるのが早いのです」

「どういうこと？」

紗无が尋ねる。その瞬間、近くの茂みが音を鳴らして揺れた。

「……！」

二人は、その音のした茂みを反射的に振り返る。

「姫様！ 下がって下さい」

「は、はい」

二人は、何がそこにいるのかを確かめようと、その茂みを見つめていた。

すると、その茂みに、何か赤い色をした螢火ほたるびのようなものが集まってきた、茂みの葉を赤く染めていった。

そして、その光が一層強くなったかと思うと、茂みの中から、一匹の鮮やかな赤い胴を持った蛇が、顔を覗かせた。

紗无は、その顔を覗かせたモノを見て、一言

「へ・び？」

と呟いた。

その横で警戒していた湍蛇良は、一つ溜め息を漏らした。

そして一息つくと、今度は真顔になって言った。

「姫様、これは、八百万やあよろずの神の一種です。恐らくこれは、蛇くちなわの幼生でしょう」

それを聞いた紗无は、目を輝かせた。

「これが、あの八百万の神様なの！？ 綺麗ね！！ 触ってもいいかしら？」

それを聞いた湍蛇良は慌てて紗无を止めた。

「何を言いますか、姫様！ そのような危険なこと！ お止め下さい。私達人間が、神に触れるなど……それに、蛇は幼生の時から既に、その鱗うろこに毒を持っています。おとなしくしている内は、鱗は体に貼り付いていて、体を守る鎧よろいの役割をしていますが、威嚇の態勢になると全ての鱗が逆立って、どこからも手が出せません」

「そうなの？ でも、母様の話では、蛇には浄化の力があるって……」

…」

「姫様。確かに蛇のその口から出される焔ほのおには、浄化の力が秘められていると言われています。ですが、蛇という神は元は邪神なのです。正体せいたいとなった蛇は、どの八百万の神よりも恐ろしく、凶暴だと言われています。」

浄化の力は元々、我が子が傷ついた時に、その傷を癒すために使う力です」

「そう……なんだ」

紗无は、それを聞いて大層がっかりした様子だった。

「姫様、そう気を落とさないで下さい。姫様は、とても運がよろしいのですよ？ 八百万の神という存在を、その目で見られたのですから。」

普通、このようなモノは、生きている間に見られるかどうか……。

私も、まさか生きている間にお目にかかれるとは夢にも思いませんでした」

「ええ……。分かってているわ。母様も、一度は生きている内に見てみたいと言っていたもの。」

この神様がどれだけ珍しいモノなのかは分かっているわ」
紗无が残念そうに応えた。

「姫様、そろそろ行きましょう」

湊蛇良が言ったのを聞いて

「そうね」

と、紗无は短く答えて湊蛇良の横についた。

紗无は、まだ名残惜なごりおしそうに蛇の幼生を振り返って、手を振った。
「じゃあね」

紗无は、別れの言葉を言つて、前に向き直る。

「運が良ければ、また会えますよ」

湊蛇良が慰めの声を掛けた。

「ええ。今度は、母様と一緒にの時に会いたいわ」

滑蛇良はその答えを聞いて、自分の主は本当にお強い方だと思った。

四章 八百万の神と神契を交わす者 其ノ貳 名前の意味

二人の後ろの草叢くさそうに、何か蠢うごく影があった。

二人がその異変に気付いたのは、小屋まであと一町のところに来たときだった。

何かが二人のあとを付けてくる。

そして、その《何か》がなんなのか、先に気付いたのは紗无だった。
蛇くちなわ!!」

紗无のいきなりの声と、その口にした言葉に驚いた湊蛇良は、反射的に後ろを振り向いた。

そして、そこに居たのは、確かに先ほど二人が出会った、八百万の神に他ならなかった。

ここで、湊蛇良はふと疑問に思った。

> 何故、蛇の幼生が私達に付いて来たのだろうか？ 近くに親が居る気配もないく

そして、湊蛇良は一つの結論に至った。

この蛇の親は、既に縄張り争いなどが原因で、子育てをできない状態になってしまったか、もしくは……。

その結論は信じたくはなかったが、それ以外に、この状況に理由を付けられる答えが一つも浮かばなかったのも事実である。

「姫様、この蛇の親は……」

紗无に自分の出した結論を話すと、紗无は顔を歪めて言った。

「じゃあ、この子はどうなるの？」

「どうしようもありません。」

これが、自然の理しんりなのですよ……」

湊蛇良は哀しそうな顔をしながら答えた。

「そんな！　この子を見捨てるの？　湊蛇良、何か方法はないの？」
紗无が必死に湊蛇良の衣の襟を掴みながら尋ねる。

「……残念ながら、私達にはどうすることもできません」

それを聞いた紗无は、掴んでいた湊蛇良の衣の襟から手を外し、一歩後ずさる。

すると、次には紗无は何かを決心したように湊蛇良の脇を擦り抜け、一人、その小さな神に向かって歩き出した。

「姫様！　何をするおつもりですか！？　危険です！」

湊蛇良が通り抜けていった紗无を振り返って慌てて止めに入る。

紗无は、その自分の護衛士に向かって言った。

「この子を、小屋まで連れて帰るわ。私には、この子を見捨てることなんかできない。自然の理なんて関係ないわ！　生き物を助けて何が悪いのよ！」

それを聞いた湊蛇良は、この時、紗无の母である由香璃ゆかりから聞いた、《紗无》という名前の意味のことを思い出していた。

>そうだった……。《紗无》という名前の意味は……。どんなに大きなモノものともせず、ただ紗うすきぬを相手にするか如く、そこに无ないものとして、苦難を乗り越える。そういう強さを、由香璃様は、姫様にお与えになったのだく

「分かりました。ですが、姫様。私は姫様の護衛士でございます。

ですから、姫様をみすみす危険な目に会わせるわけには参りません」
それを聞いて、紗无は首を傾げた。

「それじゃあ、どうするの？」

「そこで、です。

姫様は私の結界の中に入りながら、蛇に近付いてみて下さい。それでもし、触れることが可能のようなら、小屋に連れて帰ることをお許しします。ですが、それで蛇が威嚇の態勢を取るようなら、日に一度、蛇を見に行くことだけをお許しします。

それでよろしいですね？」

「湊蛇良！！」

その答えを聞いた紗无は、顔を輝かせて喜んだ。

「では姫様、ゆつくり近付いてみて下さい」

紗无は、顔を強^{こわ}ばらせながら軽く頷くと、静かに蛇へ歩みを進めた。

>お願いだから、恐がらないで……！！<

紗无は、心の中でそう祈りながら、ゆつくりとその小さな手を蛇に伸ばした。

>あと……あともう少し！<

湊蛇良が息を吞んで手の行き先を見守る。

紗无の手が、蛇に届いた。

と、その瞬間、蛇は眩^{まぶ}しいほどに赤く光り輝き、二人は抵抗する間もなく光に呑み込まれた。

……

四章 八百万の神く神契を交わす者く 其ノ参 神契（前書き）

神契〃しんけい
と読みます。

四章 八百万の神々神契を交わす者 其ノ参 神契

.....

「ここは、どこ？」

紗无が目を開いた。

近くには湊蛇良もいる。

「どうやら、私達はどこか違う場所に飛ばされてしまったようです
ね.....」

「どこかって、どこに？」

「それは、あのモノが教えてくれるでしょう」

湊蛇良はそう言つと、遠方を指差した。

そこには、さっきまで手の平に乗るくらい大きさであつたはずの蛇が、さっきまでの何倍もの大きさで、地を這いながらこちらに向かつて来ていた。

蛇は、二人の前まで来ると動きを止めた。

>そなたらは、誰だ？<

二人はその、頭に直接響いてくるような感覚に驚いた。
だが、その低く、どこか通りの良い《声》は、確かに今、二人の前に佇んでいる蛇が発したものだということが分かった。

>そなたらは、誰だ？<

もう一度聞かれて、湊蛇良は言葉を返した。

「私は、この隣にいる少女の護衛士をしている、湊蛇良と言います」
隣で湊蛇良が答えたの聞いて、慌てて紗无も答える。

「紗无です」

>サ・ナ。そなたが、我を助けようとした人間か.....<

蛇は呟くと、紗无を見た。

>ほおう。人間には珍しいほどの力と、それに見合う優しさを宿し

ているな。そして、その真名まなに与えられた驚くほどの強い守護< 二人は、呆然と蛇の言葉を聞いていた。

>そなた、サナと言ったな？<

いきなり話しを振られて、紗无はビクツとして答えた。

「は、はい……」

>そう硬くなるな。そなたに我の真名を与える権利をやるう<

その瞬間、湍蛇良が口を開いた。

「それは、どういうことだ！ 八百万の神は、余程の事がない限り、決して人間に真名は付けさせないはずだ！」

>ああ、そうだ。だが、我は今、親がいない。それ故に、我に名を付けるモノもない<

「だがそれは、姫様を主あるじと認め、神契しんけいを交わすということ。姫様はまだ、神契に耐えられるだけのお力をお持ちではないのだ。体が保もつはずがない」

>それは、そなたがその娘を弱く見すぎているだけだ。その娘の力と、その真名に宿った守護があれば、娘にはなんの苦痛もないだろう<

二人のやり取りを聞いていた紗无は、我慢できずになって湍蛇良の衣の袖を引っ張った。

「湍蛇良、どういうこと？ 神契って何？」

紗无の小声の質問を聞いて、湍蛇良も小声で質問に答えた。

「神契とは、八百万の神と契ちがひを交わすということです。

ですが、神契とは普通、とても大きな力を持っている者が、八百万の神の許しを得て、その神に名前を与えるということ。それでも、神契を交わした者は寿命を短くすると言われています」

>マダラと言ったな？言っておくが、その娘の力は神契を交わすには十分すぎるほどのものだ。

寿命に関しても、その娘に与えられた守護の力で、影響はない< それを聞いて、湍蛇良は黙ってしまった。

それは、湍蛇良がふと、あることに気が付いたからであった。

この蛇と神契を交わしておけば、蛇は主を守らなければならない。それは、紗无への身の危険が少なくなるということではないだろうか。

> 我はまだ幼生だ。宿主がいなければ、体が保たない。サナ、そなたが決めるのだ。我に真名を与えるか、否か……<

「湍蛇良……」

紗无がどうすれば良いか分からず、弱々しい声で湍蛇良の名を呼んだ。

だが、湍蛇良はその時には既に言うことを決めていた。

「姫様。これは、姫様がお決めになって下さい。姫様が、好きな方を自由にお選びになって下さい」

「私が……決めていいの？」

紗无が不安気に尋ねる。

「はい」

湍蛇良は力強く答えた。

「それじゃあ……八咫^{やた}……。あなたの名前は……八咫。どんなものよりも、あなたが大きくいられるように。八咫というのは《大きいモノ》を指す言葉よ」

> 八咫……。確かに、貰い受けた<

そして、その声が遠くなったかと思うと、二人は小屋の前に立っていた。

そして、下を見ると、そこには元の大きさに戻った《八咫》が、蜷^{くろ}局を巻いてこちらを見上げていた。

すると、八咫は急に紗无に向かって高く跳び、赤く輝く球体になったかと思うと、紗无の左手に溶け込んだ。

溶け込んだ左手の甲には、赤い紋様のようなものが浮かび上がった。そして、紗无は声を聞いた。

> 我が必要な時は呼ぶがよい。何時^{いつ}いかなる時でも、我はそなたの支えとなる……<

五章 邪神へ八咫の焰

く絆で繋がれし想い

其ノ壱

報答（前書き）

焰Ⅱほのお

報答Ⅱほうとう

と読みます。

小屋に戻った二人は、同時に同じことを思った。

> 長い一日だったく

紗无は、自分が交わした神契について、まだあれは夢ではなかったのだろうかと思った。

まさか自分が、話に聞いていた八百万の神に会って、それも、神契を交わすことになるとは、紗无自身、夢にも思わなかっただろう。だが、確かにあの出来事があったことは事実であり、それは、紗无の左手の甲にしっかりと刻まれていた。

紗无は、自分の左手に刻まれた紋様をしげしげと眺める。

その紋様は、八咫と同じ鮮やかな赤色をしていて、何か、宝石のような輝きを放っていた。

その紋様の形は、紗无にはよく分からなかった。

それはおそらく、人が知るものではないのだろう。

そんなことを考えていた紗无に、湍蛇良が声を掛けた。

「姫様。お腹がお空きになったでしょう。今、夕餉ゆうげを作ります」

そう言っていると湍蛇良は立ち上がる。

「でも、湍蛇良、材料はあるの？　今日は何も採って来なかったもの……」

紗无が心配そうに湍蛇良に聞いたが、湍蛇良はそれに微笑みながら答えた。

「ご心配には及びません。八咫に会う前の一刻の間に、私がきのと土筆つくしを懷に納めて参りましたから」

紗无はそれを聞いて、湍蛇良は本当に凄いと思った。

「全然、気が付かなかったわ……」

紗无の言葉を聞いて、湍蛇良はこの時、確かに紗无は、ほんの少し前までとても苦しんでいたんだということを感じ取った。

湊蛇良が夕餉を作り始めて、特に何もすることがない紗无は、ふと八咫のことについて思った。

> 今、私が八咫に話しかけたら、八咫は応えてくれるのだろうか…
…<

そんなことを考えていると、だんだん好奇心が湧いてきた。

そして紗无は、ついに意を決して、八咫に話し掛けてみることにした。

> 八咫…：聞こえてる？ 八咫？<

すると、どこからともなく、あの少し低いがどこか通りの良い声が、紗无の体に直接響いてきた。

> 何用か？<
なにようか

その声が紗无の体に響いた瞬間、紗无の左手の紋様が微かに光を放った。

かと思うと、見覚えのある赤い胴体が、紗无の目の前に姿を現した。
「八咫！？」

その八咫のいきなりの出現に、紗无は思わず大きな声を出してしまった。

そして、自分が大きな声を出したことにようやく気付いた紗无は、慌てて両手で口を押さえたが、その行動をするのはさすがに遅かった。

「姫様！ どうかなさいましたか！？」

紗无の声を聞きつけた湊蛇良が、血相を変えて居間に駆け付けた。

そして、そこにいる一人と一神いっしんを交互に見比べ、今の状況を瞬時に把握した湊蛇良は、静かに、『夕餉を作る』という自分の仕事に戻っていった。

紗无はその湊蛇良の判断力の高さに感謝し、半ば感心しながらそれを見送った。

そして、紗无が安堵あんどしていると、八咫の声が紗无の体に響いてきた。
> 何用か？<

その声を聞いた紗无は、慌てて八咫に向き直った。

「あ、あの……その……」

自分が八咫を呼んだにも関わらず、何を聞くか少しも考えていなかった紗无は、言葉を詰まらせてしまった。

>なんだ？ 我を必要としたのではないのか？<

まだ、何を聞こうか考えている紗无に、八咫は重ねて質問をした。

だが、この時紗无が、真しんに考えるべきは、《八咫に何を聞くか？》ではなく、《何故自分が八咫を呼んだのか？》ということであった。

そして、当の紗无本人は、そのことに全く気付いていなかったのである。

だが、紗无にとっての幸運は、その目の前にいるのが八百万の神で、その八百万の神が神契を交わした相手であるということであった。

神契を交わした神は、宿主の心を読み解く力がある。

>なるほど。我を必要とした理由はそれか<

八咫は一神、納得したように言うと、紗无の方へとその身をくねらせ、近寄ってきた。

そして、紗无の膝元まで寄ってくると、その小さな顔を紗无の丁度お腹の辺りにまで持ち上げ、一度、その口から糸のように細い舌を覗かせた。

そして、その舌が口の中に戻っていくと、一瞬、八咫の眼と紗无の左手の紋様が、赤く淡い光を放った。

そして、次の瞬間。

八咫がその口を大きく開き、紗无に向かって鮮やかな赤い色の焰ほのおを吐き出した。

紗无はそれにびっくりして、すぐに目を瞑り腕で顔を覆ったが、そのあとに感じた感覚に、腕を下ろし、ゆっくりと目を開いた。

そこには、確かに八咫が吐いた焰が渦巻いているのに……

>熱く……ない……。それに、なんだか、優しい感じがする……<
そう感じた紗无の心を読んだのか、八咫が言った。

>それは、浄化の焰だ<

それを聞いた紗无は、自分の意識が遠退いていくのを感じた。

「――」

>何か……聞こえる……<

「――様――!」

>……<

「母様――!」

>私の声!?<

「母様――! 見て見て――!」

「あら、上手にできたわねえ紗无」

その話し声を聞いた紗无は、ハツとして目を開いた。

「ここは……どこ?」

辺りを見回して、紗无は呟いた。

紗无の周りには、どこまでも続いていそうな草原が、見渡す限り広がっていた。

>私……ここを知っているわ<

>その通りだ。そなたはこの場所を知っている。この草原の景色は、そなたの記憶の断片を写して出来たもの<

体の中に、聞き覚えのある声が流れ込んできた。

「その声は……八咫!?」

>そうだ……<

「八咫。私は今、どうなっているの?」

紗无が八咫に尋ねる。

>簡単に言うと、今そなたは、我が作り出した世界にいる。向こうの世界では、そなたはただ、我の浄化の焰に包まれているだけだ<
「そう。じゃあ、湍蛇良が心配することはないわね。で、私はここで何をすればいいの?」

紗无がもつともな質問を投げ掛けた。

>そなたの自由にすればよい。さすれば、自ずと道は開けるく
そして、返ってきた言葉に紗无は困った顔をした。

「そんな……」。

自由にしろって言われても、一体どうすれば……」

紗无がそう思うのも無理はない。

だが、ここは八咫が紗无に浄化の焰を当てて現れた世界。

浄化の焰で相手が行く世界は未知だが、相手が行った世界は、自分で考えて行動すれば、確実に相手にとって、良い効果がある。

それを知っている八咫は、紗无に言った。

>サナよ。そなたがこの時間、場所でやり残したこと、そして、今
したいことをしに行くのだから

紗无にはまだ、自分が何をしたいかは全然見当が付かなかったが、
とりあえず今は、あの《二人》のところへ行こうと思った。

「分かったわ。八咫」

すると、八咫の気配が少しずつ薄くなっていくのを紗无は感じた。
行こう。

あの頃の《私》と、《母様》のところへ……。

五章 邪神へ八咫の燭　　く絆で繋がれし想い　　其ノ参　母

草原に生えている草花は背の高いものがほとんどで、私はそれらをかき分けるようにして、ひたすら二人の声を頼りに前へ進んだ。

私の息が、少し切れ切れになり始めた頃、やっと背の高い草花を抜け、次は大小様々な綺麗な花々が広がっている場所に出た。

「ここ……。ここだわ……」

私は、何かを思い出したように、見覚えのある景色を見回した。

>この場所のどこかに、《私》と《母様》がいるはず……<

私は必死に、その二人の姿を探した。

だが、二人の姿を見つけることは、大して難しいことではなかった。
>いた……。<

「母様！　これ、あげる！」

「ありがとう、紗无。母様はこんなに綺麗な花の冠^{かんむり}、貰ったのは初めてよ」

「本当！？」

《母様》が答えるのを聞いて、小さい《私》は嬉しそうな顔で言う。
私はしばらく、その二人のやり取りを懐かしむようにじっと眺めていた。

そして小さい頃の《私》が、私に気付いてこっちを見た。

私は慌てて、身を隠そうとしたが、そこにはもう、背の高い草花はない。

私は諦めて、その小さな《私》に手を振った。

《私》はそれを見て

「母様、あそこに綺麗な女の子がいるよ」

と、《母様》の着物の袖を引っ張って言った。

それを聞いて、《母様》は静かな動作でこちらを振り向いた。

そして、私に向かってニツコリと微笑む。

それは、本当に柔らかな、心の中の靄^{もや}を全て取り除いてくれるよう

な笑顔だった。

「母……様……」

私は、思わず呟いて、咄嗟に口を押さえ、俯いてしまった。そうしなければ、泣き声が全て外に出ていってしまいそうだったから……。

だが、それでも押さえきれない瞳からは、大粒の涙がその腕を伝って落ちていった。

それを見た《母様》は、少し、困った子を見るような顔付きになったが、また、元の微笑みを浮かべて、私の元に歩み寄る。

そして、優しく私をその腕に抱きしめてくれた。

「かあ……さまつ」

《母様》は、泣いて上手く言葉の出ない私を、赤子をあやすそのように、背を軽く叩いて落ち着かせてくれた。

そのおかげで、少しずつ落ち着きを取り戻した私は、一つ深呼吸をすると、《母様》に向かって言った。

「母様、ありがとう……」

そう、あの時私は、この言葉を言いたかったんだ。

言いたかった言葉をやっと言えたことで、また瞳から涙が溢れてきた。

まだまだ幼かった私は、あの時、《母様》にお花で作った冠を褒められて、「ありがとう」と言いたかったのに、恥ずかしくて、結局この言葉を言うことができなかったのだ。

「母様、ありがとう……ありがとう……」

私は、この時言いたかった言葉を泣きながら何回も繰り返した。

それを《母様》は、私の頭を優しく撫でて抱きしめることで応えてくれた。

そして、それを後ろから優しい笑顔で《私》は見守っている。

その笑顔の《私》を、私が涙で見えにくくなった瞳に写した瞬間、視界を神々しいばかりの光が覆った……。

五章 邪神へ八咫の燭　　絆で繋がれし想い　　其ノ肆　滑蛇良

神々しい光に包まれて目を瞑っていた私は、まぶた瞼の裏からその光が少しずつ引いていくを感じた。

そして、目を開けられるくらいにまで光が引いたのを確認すると、私はゆっくりと瞼を持ち上げた。

>戻って……きた？<

一瞬、私はそう思った。

だが、それは違っていた。

>ここは……お屋敷？<

私が目にしたところには、また見覚えのある、ほうろうかく珙琅櫛の懐かしい屋敷が広がっていた。

>ここは……私の寝間？<

次に私が立っていたのは、いつも私が寝ている寝間であつた。

>今度はどうすればいいのだろう……<

私は考えたが、結局、考えても何をするのか見当が付かなかったため、とりあえず、《私》がいそうな場所を思い付く限り当たってみようと思った。

まずは、皆が朝餉あさけを食べる楼ろうの間へ。

だが、そこには誰一人居なかった。

次は、母様、父様、又牙さか、またら滑蛇良の部屋を順番に見ていく。

だが、やはりそこにも、人の姿は見当たらなかった。

>あと残っている場所で、誰か居そうなところという……<

私は考えて、やっと一つの答えを見いだした。

>中庭……<

そこは、私が小さい時、よく滑蛇良と蹴鞠けまりなどをして遊んだ場所だった。

>あそこなら……きっと……<

私は、半ば走りながら橋廊^{はしろう}を渡って中庭へ向かった。

そして、私が中庭に着いた時には、一筋の汗が私の頬を伝い落ちていた。

「い……た……」

私は呟いた。

そこには、楽しそうに笑いながら、『渚蛇良』に向かって鞆を蹴っている小さい頃の『私』が居た。

すると、『私』が上手く鞆を足に当てることができなかつたため、こちらに鞆が転がってきた。

それを私は慌てて受け止めると、『私』に向かって微笑んだ。

それを見た『私』も、私に向かって笑顔を向けた。

そして、「姫様、大丈夫ですか？」と駆け寄ってきた『渚蛇良』の方を、小さい『私』は指差した。

「渚蛇良……」

私が呟いたのを聞いて、渚蛇良はこちらに目を向けた。

「姫様、お具合は大丈夫ですか？ お顔が冴^さえないようですが……」

それは、『私』に向かっての言葉ではなく、明らかに私に向けての言葉だった。

「大丈夫よ、渚蛇良。それより、もつと自分の体を気遣ってちょうだい。あなたはいつも、私のために無理をするのだから……」

それを聞いた渚蛇良は、少し驚いたようだったが、いつもの優しい顔付きになって言った。

「承知致しました」

「絶対よ？ 今の渚蛇良なんて、夜も寝ないで小屋の番をしているんだもの……」

そう。私はいつも、渚蛇良が夜になると小屋を抜けて見回りに行っていることに気付いていたのである。

「それは……なんとも私らしいですね」

渚蛇良は、それを聞いて苦笑を浮かべた。

「本当よ！ 私に心配されなくなったら、これからはもう少し自分

の体を大切にしてください」

「重々、肝に銘じておきます」

湊蛇良はそう言って深く頭を下げた。

それを聞いた私は、笑顔を見せて言った。

「でも、良かったわ。私の気持ちが言えて……。あと、ごめんなさい……」

湊蛇良は、私にいきなり謝られて、どうしたことかと動揺した。

「何故、謝るのですか？」

その質問に、私は澄んだ声で答えた。

「実はね？ この後鞠を取りに行った《私》が、誤って池に落ちそうになるのを、湊蛇良が身代わりになって助けてくれたの……。それでね？ 私、その後湊蛇良が池に落ちたのは私の所為^{せい}だって言うて、泣き止まなくて、湊蛇良に謝ることができなかったの……。だから今、言うわ。ごめんなさい。それから、助けてくれてありがとう」

《湊蛇良》はそれを聞くと、私の前まで来て片膝^{かたひざ}を付き、私に向かって言った。

「私は姫様の護衛士です。ですから、その行為は当然のことです」

「でも……」

私は口を開いた、が……

「ですが、姫様のその言葉をしっかり受け止めるのも、護衛士強^しいでは従者としての私の務め。ですから……」

《湊蛇良》は、私に向かって微笑むと、優しい声で言った。

「どういたしまして」

それを聞いた私も、湊蛇良に向かって微笑んだ。

そして、あの光がまた、私を包み込んだ……。

第五章 邪神へ八咫の燭　　絆で繋がれし想い　　其ノ伍　　叉牙

私はまた、光が引くのを瞼の裏に感じながらそつと目を開いた。

>次はどこに來たのだらう？<

そう考えた私だったが、今度はそこがどこであるのかはすぐに分かった。

それもその筈で、そこは先ほど《私》を探していた時に一度入った、叉牙の部屋であつた。

そして、私は後ろの几帳きうちょうの陰に、誰かがいることに気付いた。

私はそれを見て納得したような顔つきになると、少し笑みを含ませ、その几帳の布を捲めくつた。

そして、そこには私が思つた通り、小さい頃の《私》がいた。

「こんにちは」

私が挨拶をすると、《私》も満面の笑みを浮かべて言った。

「こんにちは！」

そう言つと、次は頬を膨らませて小さな《私》が言う。

「お姉ちゃん、捲つたら駄目よ！　叉牙に見つかつちゃうじゃない！」

それを見た私は、《私》の怒つた顔を見てつい笑ってしまった。

そして、それを見た《私》はまた怒つたように言った。

「何がおかしいのよ！」

それを聞いて反省した私は、

「ごめん、ごめん」

と、《私》の頭を撫でながら謝る。

すると、妻戸つまどを開けて誰かが入ってくる音がした。

今、私達がいるのは母屋お母やである。

ここまで入つて来るのには、襖障子ふすまじょうじを開けてこちらにまでこなければならぬ。

そのため、二人は襖障子を見つめて、その誰かが来るのをじっと待っていた。

すると、間もなくして、予想通り襖障子を開けて、入って来る者がいた。

だが、運悪く、その者が入って来たのは褥じゅうを挟んで向かいの襖障子だったため、褥がその者の姿を遮ってしまつて、誰が入って来たのか確認ができない。

それでも、私にとっては一度声を聞ければ、その者が誰なのかすぐに知ることができた。

この部屋に入ってきて、《私》がここに隠れていた。

ならそれは、彼かの人に違いなかった。

「姫！　ここに居るのは分かつているんですよ？　かくれんぼは終わりです。早く出てきて下さい」

「叉牙！！」

私は、その久方ぶりに見る姿に飛び付いた。

「ひ、姫！？」

叉牙は驚いて、私を受け止めた。

「叉牙！　元気になっている？」

私は無邪気に尋ねる。

「はい。この通り……」

叉牙はそう言つて、着物の袖を上げて見せた。

「そう！　それは良かったわ！」

私は、叉牙が元気になっていることを直に感じたようで嬉しかった。

「姫も、お元気そうで何よりです」

それを聞いた私は、今自分が一番気になっていることを叉牙に尋ねた。

「それより、今はどうしているの？」

それを聞いた叉牙は、顔を暗くして俯いてしまったが、小さな声で話し始めた。

「今の私は、暗い、牢ろうのような場所に監禁されています」

「そんな！ 大丈夫なの？」

私が心配になつて尋ねる。

「手足が自由なだけましですよ……。食事も朝、昼、晩、全て貰っていますしね」

それを聞いて、私は言った。

「そう……。分かったわ。私、お屋敷が直つてここに戻ってきたら、すぐに與咲^{ヨシキ}風に向かう。それで、叉牙を助け出す」

それを聞いた叉牙は、驚いた表情のまま固まつた。

「何故、姫は私が與咲風にいることをご存知なんですか？」

その言葉に、私は微笑んだ。

「叉牙のここに来るまでの旅の話を知っていたら、すぐに分かるわ」
その答えに、叉牙は苦笑した。

「そうですか……」

「止めないの？」

私の質問に、叉牙は笑みを含んで答えた。

「姫がこうと決めたことを絶対に曲げないことは、重々承知です…

…。待っていますよ……。姫……」

二人は微笑み合う。

そして、光が私を包んだ。

これが最後になると、うつすら感じていた私は、光が自分を完全に包んでしまう間際、《私》に向かって最後の別れを告げた。

「さようなら……《紗无》……」

五章 邪神へ八咫の焰

く絆で繋がれし想いく

其ノ陸

紗无を想う皆の気持

光が遠退いたのを感じた紗无は、ゆつくりと目を開いた。

そして、そこは丁度、八咫やたの放った浄化の焰が紗无から引いていくところだった。

> 戻って……きたのね…… <

紗无はすぐにそう感じた。

周りから、小屋の至るところに柱などとして使われている檜ひのきの芳香と、畳に使われている蘭草いぐさの独特の香りが、紗无を優しく包み込んだ。

目の前には、少し小さめの囲炉裏いろりがあつて、何かをぐつぐつと煮込んでいるようだ。

そこから漂う良い匂いに嗅かいで、紗无は

「良い匂い……」

と、呟いた。

すると、囲炉裏の向こうにある妻戸を開いて、よく知っている顔が、中に入ってきた。

「湊蛇良まだら……」

その瞬間、紗无は久しぶりにその顔を見たような気がして、息を詰めた。

> 泣きそうだ…… <

紗无はそう思った。

だが、紗无は齒を食いしばって、その出てきそうになった涙を抑えた。

「姫様、お戻りになったのですね？ 丁度、夕餉ゆづげができましたよ」

そう言つて、湊蛇良は囲炉裏を挟んで紗无の向かいに腰を落ち着けた。

そして、湊蛇良は椀わんに先ほどまで煮込んでいたものを掬すくい、紗无に

渡してくれた。

そして、

「米も、あと少しで炊けますので、もう少し待っていて下さい」と、紗无に言った。

それを聞いた紗无は、ふと疑問に思った。

>時間が、あまり経っていないわ……<

すると、今まで紗无の後ろに佇んでいた八咫が紗无の心を察し、答えた。

>サナが先ほどまでいた世界と、今いる世界は、時間の流れが違うのだ。あちらの世界で、サナが三刻と感ずても、こちらでは二つと経っていないこともあり得る。そういうものなのだ……<

それを聞いた紗无は、心の中で呟いた。

>浄化の焔って凄いのね……。でも、悲しいわ。なんだか、向こうの世界と一緒に話した時間や、向こうの人達と一緒にいた時間も、同じように減ってるみたいで……<

紗无の瞳が少し翳る。

>だが、あちらで会った人々の気持ちは、本当のものだ。人々が持つ一人一人の気持ちは、どこかで繋がっている。我の焔で作られる世界は、その気持ちと、その者が今会いたいと願う者の中で、良い効果を与える者だけを取り込んでできる世界。そう言っているかもしれない。

八咫はそう教えてくれた。

そして、紗无はまた、涙を流した……。

それは、今もどこかで自分をここまで思ってくれている人々がいるという実感が、一気に涙となって込み上げてきたからであった。

>母様、湍蛇良、叉牙、本当に、ありがとう……<

六章 動きだす影へ謎の少年 其ノ壱 人形（前書き）

人形Ⅱひとがた
と読みます。

第六章 動きだす影へ謎の少年 其ノ壱 人形

八咫との心の会話を一旦中断して、紗无は夕餉を食べることに集中しようと涙を拭いた。

涙が少しずつ治まってきた紗无は、前に座って静かに見守っていてくれていた湊蛇良に微笑んで言った。

「ごめんなさい。いきなり泣いて……」

「いえ。涙は、その水と一緒に、苦しみも少しずつ流していつてくれます。だから、泣きたい時は、泣けるだけ泣いてしまうのが一番です」

その言葉を聞いて、紗无は心から、湊蛇良という存在その人に感謝した。

「いつも支えになってくれて、ありがとう」

その感謝の言葉に応えて、湊蛇良は優しく微笑み、言った。

「どういたしまして」

泣き止んだ紗无は、早速夕餉に目をつけた。

「湊蛇良。今日の料理は何？」

紗无は、初めて見る料理に興味津々といった様子で、湊蛇良に尋ねた。

「こちらが、採ってきていた茸きのこと、少し炙った土筆つつしを、鮎あひのだしで煮込んだものです。

そしてこちらが、少し残しておいた炙り土筆に塩まひを塗ぬしたものです」

紗无は、それを聞いて感嘆した。

「美味しそうね！ いただきます」

そこで紗无は、ふと気になったことを口にする。

「八咫は、何を食べるの？」

湊蛇良はその疑問に答えた。

「八咫は八百万の神であるため、元来何も食べなくても大丈夫の筈

です」

「そんな！　こんなに美味しいのに……」

紗无は、土筆を一本口に含んで言った。

「そう言うと思っていました。恐らく、八咫が食べなくてもよいということは、食べることもできるのでは？」

最後の言葉を八咫への質問として、湍蛇良は八咫を振り返って言った。

「確かに、我々八百万の神は、基本的に食べようと思えば口にできない事はない」

それを聞いていた紗无は、顔を輝かせて、椀わんに茸と土筆を煮込んだものを装よそって八咫のところへ行った。

「はい、八咫」

紗无は八咫の前に椀を置いた。

「では、ありがたく貰うとしよう。人間の食べているものを食すのは初めてだ」

そう言うのと、八咫の体が薄明るく輝き、次の瞬間には青年の姿に変わっていた。

紗无と湍蛇良は、そのいきなりの出来事に啞然とした。

「この姿の方が良いと思ってな」

八咫は平然とした表情でそう言う。

青年の姿の八咫は、その暗めの赤い髪を後ろで束ねて、瞳は蛇の姿の時と同じように、鮮やかな赤を宿していた。

顔も綺麗に整っており、町に出れば、誰から見ても美青年と映りそうなほどの容姿であった。

暗くて、周りがほとんど見えない。

聞こえるのは、ただただ燃える火花の散る音と、向かいにいる者の微かな息遣いだけだ。

唯一光になりえる筈のぽつぽつと置いてある灯台も、ほとんど役に立っていない。

「順調に、進んでおるのか？」

「はい。あと二年もすれば、あれを手懐けることは容易いことかと

……」

「そうか、ならよい。では、そのまま今まで通り、呪言を続けよ」
「御意」

第六章 動きだす影へ謎の少年 其ノ貳 狩耶へカリヤ

今日は朝から、少し強めの雨が降っていた。

今は午の刻三つを過ぎたくらいの昼時だ。

湊蛇良は先ほどから、昼餉ひるめしを作り始めている。

紗无は最近、料理を湊蛇良に教わるようになっていた。

最初、湊蛇良は

「危ないからお止め下さい」

と、紗无に刃物を持たせようとはしなかった。

だが、紗无のあまりの懇願に負けた湊蛇良は、洪々、紗无に料理についての伊呂波いろはを一から教え始めた。

しかし、紗无は覚えが良く、ここ二、三日で十種類以上の料理を一人で作れるようになった。

以前紗无が、八咫にその自分で作った煮物と汁物を食べてもらうと、八咫は

「良い味が出ている。マダラの料理に引けは取っていないだろう」

と、冷静な態度でそう言った。

そして、それを聞いた紗无は、案の定料理を進んでやるようになっていったのである。

紗无は今日も、湊蛇良に料理を教わっている。

そして、八咫はというと、あの日を境に、人間の姿でいることが多くなった。

恐らくそれは、いつ、紗无が味見をしてと頼みに来るか分からないということもあったのだろう。

だが、一番の理由は、八咫自身がその姿を気に入っているということだった。

紗无は、そのことについて、

「ちゃんと言葉で話ができるから楽よ。 心の中だけだったら、湊

蛇良には何も聞こえないもの」

と、どちらかというところ、ちゃんと口で話し合いができるという点で、特に否定はしていなかった。

さすがに、眠る時は元の蛇の姿に戻って、褥しとねの上で蜷局とべうを巻いて眠っている。

そして、今は人間の姿で、小屋の柱に背を凭もたせ掛け、雨でどんよりとした空を眺めていた。

しばらくして、八咫は彼方に、一羽の鷹たかが一直線にこちらに向かって来ているのに気付いた。

「マダラ。良の方角ひなかくから、鷹がこっちに向かって飛んで来るぞ？ どうする？ 落とすか？」

湊蛇良はそれを聞いて、慌てて八咫を止めた。

「待て、八咫。あれは、私達の仲間からの文ふみだ」

言うや、湊蛇良は雨の中外に出て、手を目の高さほどに上げ、その鷹を手に留まらせた。

そして、その鷹の足に結びつけてあった紙を取って、その鷹も連れて、小屋に戻ってきた。

その鷹の足に結んであった紙を、湊蛇良は慣れた手付きで広げた。隣では、八咫が興味津々といった様子で、紙を覗き込んでくる。

湊蛇良の脳裏には、八百万の神は、人間の書いた文字が読めるのか？ という素朴な疑問が掠かすめたが、湊蛇良はその疑問を精神力で振り払い、文の内容に集中した。

そして、湊蛇良はその書面に書かれた内容を読み終え、ゆっくりと息を吐いた。

「湊蛇良？ 途中から私、勝手に昼餉作っちゃったけど……大丈夫かな？」

そんなことをしている内に、後ろの襖障子ふすまじょうじを開けて、紗无が出てきた。

「姫様。良い知らせがありますよ。」

なんと、お屋敷の修繕しゅうけん作業が終わるのが、四年ほど早くなったようなのです」

それを聞いた紗无は、パツと顔を輝かせた。

「本当！？ 嬉しいわ！ あら！ 狩かりや耶が文を運んできたのね！ 偉いわ狩耶！」

紗无は、滑蛇良の肩に留まっている鷹の狩耶を撫でてから、また話し始めた。

「お屋敷が元に戻れば、母様や父様と会える。そうすれば、八咫を母様に紹介できるし、父様に與咲よるな風への遣いに出してもらったためのお話もできる……」

紗无は、待つのがあと六年にまで縮まったという喜びに、嬉しさを抑えきれないらしい。

「ようございましたね、姫様。私も嬉しい限りです」

第六章 動きだす影へ謎の少年 其ノ参 声

「ところで湊蛇良？ 何故急に、それまでの年月を削ぐことができたの？」

紗无の口にした疑問に、湊蛇良はまた、文に視線を戻して、そこに書いてあることを話した。

「それがですねえ。この文によると、雪様の護衛士である樅殿が、直々にお屋敷に出向いて、式神を使って修繕作業に尽力しているよなのです」

樅とは、式神を扱う才に長けている、護衛士には珍しい女術士である。

それを聞いた紗无は、少し複雑な表情になって言った。

「あの人なら確かに、とても効率よく作業をして、四年くらいの短縮はできなくなさそうだけれど……。じゃあ、雪姉様には誰が付いているの？」

「それは、樅殿も考えていらっしゃったようです。

文を飛ばして、沙曳様の護衛士をしていた修羅と、その弟の烏眸祇に、雪様の護衛を一任させたようです」

「そう……。それなら大丈夫ね」

紗无は、沙曳のことを思い返したらしく、少し顔を曇らせたが、その瞳に宿る力強い光は、しっかりと前を見据えていた。

>ここは……？<

紗无は、どこまでも続きそうな闇がある、どこか地下のような場所にいた。

>怖い……<

紗无の心に、一瞬だけ恐怖心が掠めた。

だが、紗无はすぐに、自分の恐怖心を改め、母の言葉を思い返した。
> 今、私がここを怖いと感じるのは、その闇に何かいると、勝手に想像してしまっているから。

しっかりと目を開いて、確かなことを見定める<

紗无は一度、目をゆっくりと閉じて、また、ゆっくりと開いた。
まず、ここがどこなのか……。

そう考えた出した紗无だったが、なんとなくではあるが、紗无にはここがどこなのか見当が付いていた。

> この感覚……夢？<

そう。紗无は、今の状況がとても、夢の感覚に似ていると感じたのだ。

それなら、紗无にとって目の前にある闇は、そこまで恐れるものではない。

その場所で立ち止まっても、埒が明からないと思つた紗无は、前に進むことにした。

暗く、湿気の多いその道を、紗无は一人、ゆっくりと、横にある壁を頼りに進んだ。

すると、前方に薄明かりが、仄ほかに揺らめいているのが見えた。

> 明かり……<

紗无は、心の中でそう呟くと、真っ直ぐその仄かな明かりに向かつて歩き出した。

そして、その明かりに、あと十歩ほどのところまで来たその時――

> 来ては駄目だ！！<

八咫と話している時のように、頭の中に直接、鋭い声が響いてきた。

> 戻るんだ！ 今、ここに入ってきてはいけない！！<

再びその声が響いて、紗无を物凄い突風が襲った。

紗无は、抵抗することもできず、その突風に吹き飛ばされた。

> 助けてくれ……私を……さ……<

紗无は、ハッと目を開けて、目に写った木の天井と、自分を上から覗き込む八咫の顔を見た。

> やっぱり……夢、だったのね……<

そう、さっきの夢について考えていた紗无に、八咫が尋ねた。

「サナ、どこへ行っていた？」

その質問に、紗无は不思議そうな顔で尋ね返した。

「どうということ？ 私、さっきまでここで寝ていたじゃない。少し、変な夢は見ただけ……」

八咫は、その答えを聞いて悟った。

> サナは、自分がさっき、今いるこの場所とは違う場所に行っていたことに、気付いていないのか<

それに気付いた八咫は、質問を変えた。

「では、その夢はどんな夢だったのだ？」

紗无は自分にとっても、その事についてはとても聞いてほしいことであつたため、できるだけ詳しく、自分が見た夢のことについて語った。

> 暗い地下にある道、その奥にある一つの仄かな光、その向こうから聞こえてきた「戻れ」と「助けてくれ」という、どこか繋がらない、矛盾する二種類の謎の少年の言葉……<

「まだ、今の段階ではその場所がどこかは、全く分からないな」

八咫が、率直な結論を出した。

「そう……。あのね、八咫。最後にその人、誰かの名前を呼んだ気がするの……」

「その名前、聞き取ることはできたか？」

八咫が尋ねた。

「いいえ……」

でも、初めに「さ」が付く名前なのは確かよ」

「サナ、そなたの名前ではないのか？」

八咫はすぐに思い付く、自分の宿主の名前を挙げた。

だが、紗无は困ったような顔をして言った。

「分からないわ……。でも、私……。あの時に聞いた声に、聞き覚えはないのよ」

「そうか……。なら、仕方がない。また似たような夢を見たら、我に伝えるのだぞ」

「えっ？ええ、分かったわ……」

紗无は少し、>何故、八咫がこんな夢のことを気に掛けるのだろうか？<と、疑問に思ったが、紗无自身、また同じような夢を見たら、やっぱり聞いてもらいたい。

そう思った紗无は、今は八咫に、その疑問についての質問はしないことにした。

第六章 動きだす影へ謎の少年 其ノ肆 少年

紗无は、久々にこの場所に来た。

あの夢からもう少しで四ヶ月。

季節は夏真つ盛り。

まさに皐月晴れといったとても良い天気だ。

その筈なのに、今紗无が立っている場所は、とてもひんやりとしていた。

>ここは、あの声を聞いた場所……。あの奥へは、もう入れるかしら……<

紗无は「今、ここに入ってきてはいけない！」というあの声を思い出して考えた。

>もう一度、あの辺りまで行ってみよう<

紗无はそう決心して、その暗い闇の中をまた、前と同じように壁を頼りに奥へと進んだ。

そして再び、あの仄かな明かりの見える場所までたどり着いた。

前と同じように、明かりがゆらゆらと揺らめいている景色。

いや、一つだけ、前とは違うモノが存在する。

「また……来たんだね……。お初にお目にかかります」

紗无はその声を聞いて、驚きを隠し切れない表情で呟いた。

「その声は……」

そこには、一人の少年が立っていた。

「こうやって、面と向かって話するのは初めてだね」

少年が、語尾に少し問い掛けを含ませて言った。

だが、まだ紗无は驚いたままのようで、完全に固まってしまっている。

「少し、驚かせてしまったかな……？」

少年は、苦笑しながら呟いた。

そして、やっと驚きから解放されてきた紗无は、まだ動かし辛そう

な口を、なんとか動かし始めた。

「あ、あの……その奥に何があるのか、気になって……」

紗无は自分の正直な思いを口にした。

その思いに、少年は微笑みながら言った。

「そうだろうね。あんなコトを言われれば、誰でも気になる。あなたの使い魔も、何か引つ掛かっていたみたいだしね」

「知っているの!? 使い魔って、蛇くちなわのこと?」

紗无は、八咫という真名を出さずに尋ねた。

それは、前に八咫に、神契しんけいで与えた真名まなは、信用できる者にしか教えてはいけないと言われたからである。

元々、神契を交わすというコトは、その相手に、《真名》という《命》を託すということなのだそうだ。

そのため、簡単にその《命》を、握らせてはならないのだ。

「そうだ。その八百万の神であるモノだ。さすがに、普通の使い魔では感じることでできないほどの小さな違和感に気付いている」

「どういうこと?」

紗无は尋ねた。

「何かが起こる兆きざしが、見えているということだ。ところで、名前を聞いても良いか?」

「私は紗无……。それで、何が起こるの? それと、前に来た時、あなたは誰に助けを求めたの? ここがどこかということも気に掛かるし……」

紗无は、今疑問に思っていることの殆どを出した。

「分かった。紗无、その問いには答えよう。だが、そろそろ彼方あいつでは朝だ。先ほどの問いには答える。明日また、ここに来ればいい」

「でも私、ここへまた来れるかどうか……。今日も、気付いたら、いつの間にかあの場所に立っていたくらいだし……」

紗无は不安そうに言う。

「大丈夫だ。ここに来たいと願えば、必ずまた、この場所に立つことはできる。少なくとも、紗无にはそれだけの力がある。ほら、朝

だ。紗无は一度戻るんだ。いいか？ 強く願うんだ」

後ろから、急に光が差し込んできて、紗无はそこに吸い込まれるような感覚を覚えた。

そして、急いで紗无は、今の内に聞きたかったことを尋ねた。

「あなたの名前は？」

そう尋ねた瞬間、視界が光に包まれる。

「私の名は、爲嵯矢だ……」

紗无は、朧おぼろげ気な視界の中で、はっきりとその名を聞いた。

第六章 動きだす影へ謎の少年 其ノ伍 秘密

朝、紗无は心の中で、ずっとあの爲瑳矢という名前を繰り返していた。

そして、八咫が視界に入ってくると、すぐに違うことに神経を移す。そういったことを繰り返して、紗无は爲瑳矢という名前を、八咫に知られぬようにしていた。

幸い、八咫は自分から紗无の心を読み取るという行為はないようなので、紗无はなんとか、その名前を知られずに済んだ。

だが、さすがに、傍から見れば、紗无はどこか、気持ちが明後日の方向を向いるのが分かったのだろう。

湍蛇良がそのことについて、紗无に声を掛けた。

「姫様、今日はどこかお具合でも悪いのですか？」

その問い掛けに、紗无はハツとして、少し慌てた風に答えた。

「い、いいえっ、そんなことないわよ。どうして？」

紗无は、答えたは良いものの、さすがにここまで動揺しては、湍蛇良には通じないと、自分の隠し切れない正直な態度を恨んだ。だが、湍蛇良も今まで、護衛士としての仕事をただこなしていただけではないのだ。

紗无のおかしな様子に気付いた湍蛇良は、声を和らげて言った。

「姫様、今は話せないということは分かりました。また、話せる時が来たら、その時話して頂ければそれで構いません。ですが、一つだけ覚えておいて下さい。私は、いつでも姫様のお傍におります。私の力が必要な時は、いつでも姫様のお力になります。そのことを、しかと心に刻んでおいて下さい」

紗无はそれを聞いて、少し、湍蛇良に隠し事をしようとした自分に恥ずかしさを覚え、照れたように頬を赤らめた。

「ありがとう、湍蛇良」

それから、紗无は上手く気持ちを切り替えながら、八咫に夢の中のコトについてできるだけ悟られないように気を付け、夜が来るのを「あの場所へ行きたい」と願いながら待った。

湊蛇良には、八咫にまだ知られたくはないということだけを話したので、それを考慮して、紗无に、今八咫がどこで何をしているかなど、知らせがいくようになっていた。

日は少しずつ沈み始め、辺りは森の中というだけあって、もう日の光のほとんどが遮られてきている。

紗无と湊蛇良は今、炊事場で夕餉の支度に取り掛かっている。

「姫様、今、料理をなさつても大丈夫なんですか？ お気持ちが不安定な間はお控えになった方がよろしいのでは？」

湊蛇良が紗无の身を案じて尋ねた。

「ええ、大丈夫よ。料理を作っている時の私は真剣なもの！」

そう言つて、紗无はまな板に置いてある沢庵たくあんを、真剣な眼差しで切った。

「ほら、綺麗に切れたでしょ？」

それを見ていた湊蛇良は、苦笑を浮かべながら言った。

「はい、そうですね。よく切れています。ですが、その行動は許し兼ねますねえ」

湊蛇良は紗无の、襖障子から八咫の様子を窺う行動を見て言った。

それに紗无は、ハッと湊蛇良を振り返り、照れ笑いを浮かべながら反省の色を示した。

「ごめんなさい」

その後、三人は夕餉を食べ、紗无は夕餉を食べ終わると、八咫に気付かれぬよう神経を使っていたことや、夕餉を作る手伝いなどが幸いしたのか、少しずつ睡魔が訪れていた。

うつらうつらしている紗无に気付いた八咫は、紗无に声を掛けた。

「サナ、眠いなら今日はもう床についた方がよいのではないか？」

紗无は、その声に少しビクツとして、眠そうな顔付きで答えた。

「ご、ごめんなさい、つい……。ありがとう八咫。じゃあ今日は、先に休ませてもらうわ」

紗无はそう言うと、少し早足になって、衣の袖をひるがえしながら、いそいそと自分の寢間に向かった。

「マダラ、サナに何かあったのか？」

> 八咫に、気付かれたかしら…… <

紗无は、居間を出るや、そんなことを考えながら自分の寢間への道を歩いた。

寢間に着いた紗无は、ハアと一つため息を吐いて、こんなことをいつまでも考えていてもしょうがないと自分を諫め、夜具に身を包めた。

さっきまでの緊張とは裏腹に、夜具に入ってしまうと、またすぐに睡魔が訪れた。

そして、紗无はもう一度強く、あの場所へ行きたいと願い、その睡魔に身を委ねた。

七章 悲しい過去の扉へ黄泉へと続く道 其ノ壺 爲嗟矢

耳を澄ますと、どこからか水の滴る音が響いてくる。

どうやら、無事にあの場所に行き着くことができたようだ。

紗无はゆっくりと目を開け、安堵した。

静かに息を吸うと、口から入ってくる空気がひんやりと喉をしびれさせた。

そして紗无は、昨日爲嗟矢がいたあの仄かな明かりの場所までの道のりを、ゆっくりと歩き始める。

> なんだか、今日はやけに胸の辺りがざわざわするく

この時、紗无は昨日とはどこか違う、何か恐怖心にも似た気持ちを抱いていた。

だが、紗无は自分の腕を背中に戻して、自らを抱くようにしながらも、一直線に自分の進むべき道を歩き続けた。

所々水が滴り落ちてくる場所があり、紗无は衣が濡れないように気を付けながら慎重に歩いていく。

そして、やがてあの仄かな明かりが見える場所に辿り着いた。

「早かったね、紗无……」

前を見ると、そこには既に、爲嗟矢が壁に凭もたれるようにして立っていた。

その後、紗无はふと爲嗟矢の姿を見て、今まで自分はこの爲嗟矢という少年のことをよく見ていなかったのだということに自覚することになる。

爲嗟矢の深い緑の衣と、その深みのある緑に合った灰色の野袴のばかまは、所々に傷が入っていて、少しだけ血がにじみ出ていた。

また、初めは綺麗に結んでいたであろう少し長い褐色の髪は、紐が切れて肩ほどまで垂れ下がっている。

だが、その漆黒の瞳は、しっかりと紗无を捉えていた。

「こんばんは、爲嗟矢……。それより、その傷はいつからなの？」

紗无は前々から、よく爲瑛矢のこと見ていなかったことに後悔しながら尋ねた。

「一年前くらいからは、このままだ……」

爲瑛矢は少し顔を曇らせて答えた。

「理由は、教えてもらえそうもないわね……」

紗无は諦めたように呟いた。

「すまない……。だが、昨日の問いにはちゃんと答えられる」

爲瑛矢は一步前へ出て、自信を持って答えた。

「じゃあ、まずここがどこなのかを教えてちょうだい」

それを聞いた爲瑛矢は、ほっとしたように短い息を吐き、口を開いた。

「ああ、私もそこから話すことを考えていたのだ。話が早い。

ここは、率直に言くと與咲風の家系が所有している、一番與咲風の本家に近い地下の牢獄だ」

それを聞いた紗无は、一番大事なことを聞きそびれていたことに気が付き、慌てて爲瑛矢に尋ねた。

「じゃあ爲瑛矢、あなたは何者なの？ くちなわ 蛇と私が神契を交わしたこ

とも知っているようだし……。一体、あなたは……」

その質問に、爲瑛矢は一度目を閉じ、意を決したようにその漆黒の瞳で紗无を見据えて言った。

「私は……與咲風家の次期当主になるはずだった人間だ」

爲瑛矢が何者なのかを知った紗无は、急に今まで心の奥底にため込んできた憎悪という名の心の欠片が、一気に弾けたような気がした。

「あなたが……お祖父様の仇の末裔……」まつえい

紗无の低く暗い声を聞いた爲瑛矢は、瞬間に体全体に物凄く大きな圧迫感を感じた。

> いけない……紗无が自分の心を抑え切れていない<

爲瑛矢は紗无から伝わってくる圧迫感に耐え切れず、水の溜まっている床に方膝を着いた。

> 「さ……な……」<

爲瑛矢は二つの意思の疎通を使つて、紗无に必死で呼び掛けた。だが、何度爲瑛矢が呼び掛けても、紗无から圧迫感が消えることはない。

やがて、爲瑛矢は力尽き、その場にうつ伏せになって倒れた。するとその瞬間、爲瑛矢の体に声が響いた。

> 哀れだなあ、人の子よ<

爲瑛矢はその声に反応して、重い頭を持ち上げた。

「お前は、誰だ！」

爲瑛矢が鋭く言った。

> 威勢がいいな。だが、今の状況ではおまえは何もできまい？<
その声は、どこか爲瑛矢を貶^{けな}しているように聞こえた。

> そなたを、今からこの圧迫から解放する<

そして、今まで貶^{けな}してきただけに、その言葉の持つ意味がとても柔らかなものだつたため、その声に爲瑛矢は尋ねた。

「何故、私を助ける……」

その質問に、声はすぐに答えた。

> 今のサナには、過去を知る権利がある。そなたのことも、與咲凪のことも……<

その言葉を最後に、声は途切れた。

そして、その場に残されたのは、圧迫感から解放された爲瑛矢と、その前方に倒れる紗无の姿だった。

爲瑛矢は、少しの間動けずにその場に倒れていたが、やがて少しずつ圧迫で麻痺していた感覚が戻ってきた。

そのため、衣から染み込んできた水の冷たさが直^{じか}に伝わってきたので、爲瑛矢は我に返った。

「紗无！」

爲瑛矢はそう叫ぶと、紗无の下へ駆け寄り、紗无を抱き抱えてその名を何度も繰り返した。

「紗无！ 紗无！ 大事はないか！」

すると、紗无は眩しいものでも見るかのようにゆっくりとその瞼を

開いた。

「い……ざ……や？」

「そつだ！ 私だ！」

爲瑛矢は、初めに紗无が発した言葉に安心すると、自分がここにいるということを示した。

爲瑛矢はこの時、紗无にまた憎悪の念を飛ばされるかもしれないという不安が過つたが、今はその小さな体が冷えてしまわないようにと自分が着ていた衣を羽織らせてやった。

その時に露あらわになった爲瑛矢の上半身には、何かに切り裂かれたような傷痕が刻まれていたが、当の本人はそれを気にも止めなかった。そして、その予想外の出来事に、紗无は一瞬驚いたようだったが、爲瑛矢を振り返って次の瞬間には、紗无は笑いだしていた。

「な、何がおかしいのだ？」

爲瑛矢は、いきなりお腹を抑えて笑いだした紗无を見てうるたえた。その質問に紗无はまだ笑いながら、爲瑛矢が羽織らせてくれた衣の裾を掴んで、爲瑛矢の目の高さにもで持ち上げてみせた。

「あなたの衣、びしょ濡れよ？」

その言葉と同時に、爲瑛矢の衣から一滴の雫が滴れた。それを聞いた爲瑛矢は、全くそのことに気付かなかった自分が恥ずかしくなって、紗无から顔を背けた。

静けさが深まり、水滴の音だけが響いていたその沈黙を、破つたのは紗无であった。

「ごめんなさい、爲瑛矢……。あなたのことを仇みに言って……」

「いや……本当のことだ……」

爲瑛矢が自分を軽蔑するかのよう to 答えた。

「私ね？ 與咲風の人に会っても、絶対に憎しみをぶつけてはいけないうて分かってた……。
なのに……」

紗无はぼつぼつと一言一言を噛みしめるようにして呟いた。

「ありがとう、紗无。私が会った人間の中で、二人目だよ。私の存在を認めてくれたのは……」

爲瑳矢は優しい顔で紗无の頬に右手で触れ、ゆっくりと撫でた。

「では、話を戻そう」

「爲瑳矢、ちよつと先に、知っておきたいことがあるのだけど……いいかしら？」

紗无は、既にかなり水を含んでしまっている爲瑳矢の衣を、丁寧に袖から順に絞りながら話し掛けた。

「ああ、なんだ？」

「今あなたは、次期当主になるはずだったと言ったけれど、そんなあなたが、何故こんな誰もいない地下にいるの？」

「そのことなのだが、少し長い話になるのだ。よいか？」

爲瑳矢の質問に紗无は、

「もちろんよ」

と言つて、衣をある程度絞れたのか、爲瑳矢に衣を差し出した。

「衣、返しておくわ。そんな格好では寒いでしょう？ 私はもう大丈夫よ。ありがとう」

紗无がそう言うのを聞いて、爲瑳矢はまだ心配そうな表情をしていたが、今度は逆に、自分が心配されてはしょうがないと思い返したのだろう。潔く衣を受け取つて、身に着けた。

「では、今から紗无には、私と與咲風についての過去を知ってもらう。よいか？」

紗无と爲瑳矢は、近くに生えている、腰を落ち着けるのに丁度良い岩を見つけて、お互いが向かい合うようにして腰を下ろした。

「そこでだ。やはり、話を聞くよりは見てもらった方が、紗无にとつても理解しやすいと思うのだ。だから、紗无にはこれから、私の《写》^{うつし}の術を受けてもらう」

それを聞いた紗无は少し驚いた。

>まさか、爲瑳矢も術を扱えるなんて……<

「じゃあ、爲瑳矢はどうするの？」

紗无は尋ねた。

「ああ、そのことだか、私も紗无と《写》の世界へ行つて、その世界での案内をしようと思つてゐる。さすがに一人では心細いだろう」その返つてきた回答を聞いて、紗无は少し安心することできた。

「ありがとう」

「では紗无、早速過去へ行こうと思う。準備はよいか？ あちらで私も、紗无の隣に付く。分からないことがあれば、すぐに私に聞けばよい」

「ちよつと待つて。そうは言うけど、私は術を受けたらどうすればいいの？ 私、何も知らないから……」

紗无はそう言うのと、少し俯いてしまった。

「安心しろ、紗无。私が術を使うと、目の前に鏡のようなものが見えてくる。それに触ればよいだけだ」

爲瑳矢は、紗无ができるだけ安心できるよう、力強く答えた。

「では、いくぞ」

そう言うのと、爲瑳矢は懷から一枚の札を取り出し、それを自分の目の高さまで上げ、瞳を閉じると、右手の人差し指と中指でそれを挟んで、何やら口ずさみ始めた。

おそらくそれは、呪言などの、今の紗无には到底理解できないものなのだろう。

やがて声が止むと、爲瑳矢の周りをごくわずかだが、冷たい風が取り巻いた。

そして、爲瑳矢は目を開けると、挟んでいた札を風にまかす。

すると、その札はふわふわとその場所に浮かび続けた。

それを確認した爲瑳矢は、ゆっくりと右手を札に掲げる。

その瞬間、浮かんでいた札に、爲瑳矢の手が溶け込んでしまった。

それを見た紗无は、驚いて声も出ないようだ。

「紗无、私の手に掴まれ。そうすればこの中に入れる。鏡はその奥だ」

その言葉で我に返つた紗无は、慌てて爲瑳矢の手を取つた。

そして、二人はゆっくりと札に溶け込んでいった。

七章 悲しい過去の扉へ黄泉へと続く道 其ノ弐 浄玻璃の鏡（前書き）

浄玻璃＝じょうはり
と読みます。

七章 悲しい過去の扉へ黄泉へと続く道 其ノ弐 浄玻璃の鏡

紗无はただただ、爲瑛矢の手に引かれるまま、前へと進んだ。札の中に入るといふのは、なんとも不思議な感覚であつた。

音は何も聞こえない。

それこそ、二人の足音や衣擦れの音、息遣いまでも。

確かに歩いてはいるのに、足にはなんの感覚も伝わってこない。鼻で息を吸つても何の匂いもしない。

こんな場所にずっと居たら、感覚が変になってしまいそうだ。

そんなことを考えていると、紗无は恐ろしくなつて、爲瑛矢の手を握る力が自然と強くなつてしまった。

それに気付いた爲瑛矢は、紗无を振り返つて言った。

「紗无、大丈夫か？ もう少しの辛抱だ。ほら、もう鏡が見えていく」

それを聞いた紗无は、ゆっくりと前方を見るために、今まで爲瑛矢の足下だけを見ていた顔を上げた。

そして、そこには確かに、爲瑛矢の言う通り、人一人ほどが写るくらしいの、縦長の鏡が置いてあつた。

その鏡は、随分古びていて、角などが少し欠けていたり、ひびが入るなどしていたが、鏡の面だけは綺麗に見えた。

だが、いざその鏡の前に立つてみると、表面は白く霞んでいて、到底綺麗とは言い難いものだつた。

そして、その紗无の複雑な表情を見て、爲瑛矢は言った。

「この鏡、遠くから見ると面は美しかっただろう？ 私も、最初にここへ来た時には疑問に思った。なんとも不思議なものだ。これは、よじほ自惚の鏡と言つてな、見る者の目には実際よりも綺麗に映るのだ。また、亡者めいしやの生前の行いのありのままを映す、浄玻璃じやうはりの鏡とも言われているらしい」

そう爲瑛矢は教えてくれた。

「では、今からこの中に入るのだが、見ての通り、一度に人一人が入るのが限界なのだ。だから、私が見本として先に入る。紗无は後から同じようにして入るのだ。よいかな？」

「分かったわ」

紗无は力強く頷いた。

だが、その時の紗无の手は、少しだけ震えていた。

やはり、自分の知らない場所に行くのだ。

緊張や恐怖といった感情が、自然と湧いてきてしまうのだろう。

爲瑳矢はその感情を少しでも和らげるため、紗无に向かって言った。

「紗无、向こうで待っているぞ。安心をし。紗无は強い娘だ。普通の娘なら、あの地下を進んで私のところまで来ることすら出来ないだろう。自信を持つのだ。よいかな？ 私と同じようにすれば、必ず行くべき場所に辿り着ける」

紗无は微かに頷いて、爲瑳矢を見た。

爲瑳矢の動きを見逃さないために。

爲瑳矢はそれを確認すると、優しく微笑んで鏡に向き直った。

そして、ゆっくりだがはつきりと、唄うようにそれを唱えた。

「我が意、^{うん}彼の下へ……」

そして、爲瑳矢はゆっくりと前へ進み、鏡の中へと吸い込まれるようにして入っていった。

その光景をしっかりと見ていた紗无の心臓は、とくんととくと音を立てながら動いていたが、紗无は深く息を吸い、心を落ち着かせると、ゆっくりと鏡の前へと向かった。

やっぱり、霞んでる……。

紗无はそう思いながら、少し鏡をさすった。

やはり鏡の霞みは取れなかったが、きつと最初は綺麗な鏡だったのだらうと一人紗无は考えながら、爲瑳矢と同じように、唄うようにそれを唱えた。

「我が意、彼の下へ……」

そして紗无は、静かに鏡へと溶け込んでいった……。

視界が光に包まれていて、紗无はうまく目を開けることができなかった。

その間紗无は、今自分がどのような場所にいて、どこに行き着くのか、全く見当もつかなかった。

そして、その状態がいつまでも続くものだから、紗无は少しずつ、本当に爲瑳矢の下へ無事辿り着けるのか不安になってきた。

早く、早く着いて……。

紗无は不安と恐怖に身を震わした。

その瞬間である。

突然頭の中に聞き覚えのある声が響いてきた。

> 紗无！<

そして、それを聞いた紗无の手は、ひんやりとした少々紗无より大きめの手に引かれ、紗无をその世界から引っ張り出した。

「紗无、大丈夫か？」

優しい声が囁く。

紗无はゆつくりとその瞳を開けて、声の主を探した。

そして、一人の人物が自分の顔を心配そうに覗き込んできているのを見つけた。

「爲瑳矢、着いた……のね？」

紗无は言葉を途切れさせながら尋ねた。

すると、爲瑳矢は優しく微笑んで紗无の手を取り、引っ張り起こしながら、片方の空いている手である場所を指差した。

「ああ。あそこが、この世界での始まりとなる場所だ」

そして、爲瑳矢が指差した先には、一つのお屋敷が物静かに佇んでいた。

今、紗无と爲瑳矢がいるのは、そのお屋敷を横目に見られる、木々がいくらか立つ小高い丘の上である。

「爲瑳矢、あれは？」

紗无が尋ねた。

「あれは、一年と半年くらい前の、與咲凧の屋敷だ」

「あれが、與咲凧の屋敷……」

紗无はその屋敷の名を反復した。

「では、早速あれの場所へ行くか」

紗无はそれを聞いて、訝^{いぶか}しげな表情で呟いた。

「あれの、場所？」

七章 悲しい過去の扉へ黄泉へと続く道 其ノ参 鏡の中

二人は暗い林の中を、與咲風の屋敷に向かって歩いていった。どうやら時刻は既に戌の刻を回って亥の刻に入っているらしい。

周りに点々と冬菊や寒椿などの花が咲いていることから、季節は冬で、霜月、または師走あたりだろうと想像ができた。

だが、自然と寒さは感じない。

それはここが、夢の中、または紗无たちが一時的に過去に来ていて、実際にはこの時分には存在していないからなのだろうか。

紗无には分からないことだらけで、頭が少し混乱していた。

だから紗无は、今一番気になっていることを、前を歩く爲瑛矢に尋ねた。

「ねえ、爲瑛矢。今私達が向かっている《あれ》っていうのはどんなの？」

すると爲瑛矢は、紗无を振り返って、少し暗い微笑を含みながら答えた。

「紗无を、よく知っている者のところだ」

紗无は、そのはつきりとしなない答えに首を傾げながらも、これ以上このことを聞いても、同じ答えしか返ってこないだろうことは、爲瑛矢との会話上なんとなく予想がついていたので、紗无は諦めて質問を変えた。

「じゃあ、何故この世界の時分が冬なのに、全然寒さを感じないの？」

「それは、私達が今実際には、この世界に存在しないモノだからだ。私達はこの時、ここにいるべき存在ではないのだ」

どうやら、紗无が考えていた内の一つは、あながち外れてはいなかったようだ。

「つまり、私達はただ傍観できるだけってことなのね？」

「ああ。この世界では紗无も私も、影響を及ぼすことはできない。

それにしても紗无。紗无は何故、今が冬だと分かったのだ？」

その質問に、紗无はきょとんとした表情で答えた。

「だって、冬菊や寒椿が目に入ったから……」

「なるほど。紗无は花に詳しいのだな」

そう言われて、紗无は少し頬を赤らめながら答えた。

「前に、母様が教えて下さったの。女性なら、花には詳しくないとなって」

「紗无の母君は、良いお方だな。私は、母親に良くしてもらった覚えがない……」

爲瑳矢は顔を曇らせた。

「ご、ごめんなさい！ 私、そういうつもりじゃ……」

爲瑳矢の悲しげな表情を見た紗无は、慌てて爲瑳矢に謝った。

「あ、ああ。私も要らぬことを言ったな。先ほどのことは気にするな」

爲瑳矢も、反省したように苦笑を浮かべながら謝った。

「では、先を急ごう」

爲瑳矢が前に向き直って言った言葉に、紗无は頷いて言った。

「ええ」

暗い林の中を、二人は枝を掻き分けながら與咲風の屋敷に向かって歩いていく。

時折爲瑳矢の方から枝の折れる音がするのだが、爲瑳矢はそれさえにも止めない。

痛くないのかな？ と、紗无が思っていると、いきなり自分の手の方から同じように枝の折れる音がしたので、紗无はびっくりしてその音のした方の手を顧みた。

だが、その紗无の手に異常はない。

しかし、先ほど折れたであろう枝が、その手に乗っていて、それがゆっくりとその手に埋もれていくのを紗无は見た。

「きゃっ……！」

紗无は短く叫ぶと、狂ったようにその枝が埋もれていこうとする手を振り回した。

その叫びを聞いた爲瑛矢が、紗无の下へ小走りで走って来る。

「どうしたのだ!? 紗无」

爲瑛矢がそう尋ねるのを聞いて、紗无はすかさずその、枝が埋もれていこうとする手を爲瑛矢に見せて助けを求めた。

「い、爲瑛矢、手にっ、枝がっ」

爲瑛矢はそれを見て、何故か安心したようにほっと息を吐くと、その枝を取ってやり、紗无に言った。

「紗无、さつきも言ったように、私達はこの世界では全く影響を及ぼすことはできない。つまり、それは裏を返せば、今いるこの世界の事物が私達に影響を及ぼすこともできないということだ」

そう言くと、爲瑛矢はその枝を自分の手に突き立てた。

そして、枝を持っていた手を離す。

すると次の瞬間、爲瑛矢の手に枝が乗り、少しずつさっきの紗无の手と同じように枝が手に埋もれていく。

紗无は慌てて爲瑛矢の名を呼んだ。

「い、爲瑛矢!? 何をしているの!」

その焦っている紗无を制すように、爲瑛矢が鋭く言った。

「紗无、よく見るんだ」

その爲瑛矢の言葉を聞いた紗无は、言われた通りにするべきだと瞬時に判断し、爲瑛矢の手をもう一度凝視する。

するとそこには、既に手の平と甲を貫通するように枝が埋もれてしまっていた。

そんな状態にも関わらず、爲瑛矢は平然とその枝を眺めている。

そこで紗无はあることに気付いた。

「血が、出ていない……」

そう呟くのを横目に、爲瑛矢は紗无に言った。

「そろそろだ。しっかり見ておくのだぞ」

紗无がその言葉に頷くと、次の瞬間に枝がスルリと呆気なく地面に

落ちた。

「こういうことだ」

爲瑳矢が言った。

それを見た紗无は、凄い、不思議、といった感情と共に、また違う疑問が浮かんできた。

なぜ、枝が自分の手に埋まっていくのかは分かった。

だが、それならなぜ、爲瑳矢や紗无の触れた枝は折れるのか。

そう疑問に思った紗无は、その疑問を爲瑳矢にぶつけてみた。

そして、その疑問を聞いた爲瑳矢は、わずかに頷いて話した。

「それなのだが、正直に言うと、私にもよくは分からないのだ。私が考えるには、おそらくこの世界は曖昧なもので、私たちもその影響を受けて曖昧なものになっているのではないかと思うのだ」
爲瑳矢は自分の考えを紗无に話した。

確かに、そういうことならここにいる二人が曖昧な存在になっていてもおかしくはない。

だが、爲瑳矢はこの時、紗无に嘘をついた。

ここは、自惚よりほの鏡と呼ばれる鏡の世界であると共に、浄玻璃じょうはりの鏡と呼ばれる鏡の世界でもあるのだ。

浄玻璃の鏡とは、亡者の生前の行いのありのままを映す。

つまり、《ありのまま》を映し出していなければならないのだ。

そこに、ここには居ない筈の二人が、枝を折るという行為はあつてはならないことなのだ。

それなのに、この二人は枝を折るという《ありのまま》に反することをした。

そして、これにはやはり理由があつて、それは爲瑳矢の紗无への優しさからのものであつた。

爲瑳矢は、紗无がもし枝に触れて、それが紗无の体をすり抜けでもしたら、どれだけ紗无が驚くかなど想像もできなかった。

そのため、紗无の心を乱さないためにも、爲瑳矢は自分の力を使って無理矢理に自身がこちらにいる存在にして、前にある枝を折って

紗无に触れるのを回避させていたのだ。

だが、こちらの世の理に逆らっているのは間違いない。

爲瑛矢はそれをしたことによって、ひどく体力を削がれていた。

爲瑛矢は次第に歩くのが困難になってきて、息遣いも荒くなっている。

着ていた衣も汗で少し湿ってきていた。

「爲瑛矢、大丈夫？ ひどい汗よ。少し休む？」

その様子に気付いた紗无は、爲瑛矢を気遣って声を掛けた。

このとき爲瑛矢は、>こういうときは、気にするな。と言っべきなのだろうが……<

などと、この場に少しも合わないことを考えていた。

しかし、爲瑛矢の体力はそろそろ限界に達しようとしていて、さすがに爲瑛矢自身も休まなければいけないことは分かっていた。

そして、意を決した爲瑛矢は紗无に向かって言った。

「悪い、紗无。では、少しでも休ませてくれ」

そう言うと、爲瑛矢は近くの太めの木の幹に寄り掛かった。

爲瑛矢がハアと息を吐く。

紗无は心配して爲瑛矢の近くに行くと、懷に入れてある麻織あさおりを出して爲瑛矢の額に浮かぶ汗を拭いてやった。

「紗无……それくらいは自分でできる。そこまで気を使わなくても良い……」

爲瑛矢は紗无の行動に朦朧とした声で言うと、ゆっくりと俯いた。

それを聞いた紗无は、まだとても心配しているような顔付きであったのだが、すぐにいつもの笑顔に戻り、言った。

「分かったわ。はい、これ。汗を拭くのに使って」

紗无に渡された麻織を受け取った爲瑛矢は、「すまない」と小さく呟くと、荒い息を少しずつゆっくりな動作にしていき、体力の回復に専念した。

七章 悲しい過去の扉へ黄泉へと続く道 其ノ肆 歪な再会（前書き）

歪
↓
いびつ

七章 悲しい過去の扉へ黄泉へと続く道 其ノ肆 歪な再会

半刻ほどが経った時、爲瑳矢は木を支えにしながらまだ少しふらつく足で立ち上がった。

「爲瑳矢、まだ休んでいた方が……」

紗无が爲瑳矢の肩を支えながら言う。

「もう、歩ける。それより、早く行かないと……間に合わなくなる」
「でも……」

紗无が心配そうに呟いた。

「紗无、ここに来た理由を忘れてはいけない。紗无は、なんのためにここに来た」

「私は……爲瑳矢と、與咲風を知るために……」

紗无は爲瑳矢の剣幕に押されて、途切れ途切れに答えた。

「そうだ、紗无」

爲瑳矢の最後の一押しに負け、決心したように紗无は爲瑳矢を支えながらゆっくりと歩き始めた。

それから二つほど歩いた二人の前に、大きな屋敷とたくさんの灯りが見えてきた。

「あれが、爲瑳矢のお屋敷……」

紗无が呟いた。

「そうだ。今は、私ではないがな。それよりも、今は《あれ》の下に急ぐぞ」

「分かったわ。で、それはどこなの？」

「ここからは私が先に行く。支えはもう大丈夫だ、助かった。私の後を付いてきてくれ」

爲瑳矢は紗无の前に立って言った。

爲瑳矢を前にして、二人は屋敷の前に佇んでいる大きな扉に行き着いた。

「大きい……」

紗无は思わず呟く。

「爲瑳矢、これ、どうやって開けるの？」

紗无がこう尋ねるのも無理はなく、その扉は人が二、三人で押したくらいではびくともしないような大きな扉だった。

「案ずることはない」

爲瑳矢が振り返って優しく答えた。

そして、爲瑳矢はそのまま扉に向かってそそくさと歩いていく。

「えっ!？」

紗无は驚いて声を上げた。

それもそのはず、歩いていった爲瑳矢が扉に突き当たった瞬間、その姿がスツと扉に吸い込まれるようにして溶けていったのだ。数秒の間、紗无はその場に立ち尽くして考える。

そして、その答えを見つけた紗无は、自身も扉の前まで行って、恐る恐る手で扉に触れた。

いや、正確にはその手が扉に触れることはなく、手が何かに突き当たるといふことも勿論なかった。

「やっぱり」

紗无は納得したようにそう呟いて、扉に同じように溶けていった。

「爲瑳矢、なぜ言ってくれなかったのよ。私たちが扉に触れることはできないって」

紗无は扉の向こうで待っていた爲瑳矢に言った。

「いや、すまない。忘れていた」

「忘れていたって……」

紗无は爲瑳矢の答えに呆れながらも「まあいいわ、先を急ぎましょう」と、すぐに頭を切り替えた。

「ここからどう行くの？」

紗无が先を促す。

「まず屋敷に入って、《あれ》の部屋に行く」

「また、《あれ》……」

紗无の言葉に爲瑳矢は「すぐに分かる」とだけ言って、屋敷に向か

って歩きだした。

屋敷の中、橋廊^{はしろう}を渡って何度か角を曲がり、やがて二人は明かりが点いている一つの部屋の前に辿り着いた。

「ここだ。入るぞ」

為瑛矢が紗无に声を掛ける。

紗无は、深く頷いて肯定を示した。

するとその時、二人が来た橋廊の向かい側から、なにやら慌ただしい足音が聞こえてきた。

「おい、向こうはどうだ！」

「問題ない」

何の話をしているかは、話の内容からは分からない。

だが、隣にいる為瑛矢はそれが何なのかを知っているようで、少し焦りの色を浮かべながら声を絞りだした。

「少し、遅かったか……」

為瑛矢が言うのを聞いて、紗无は彼に尋ねた。

「何が？」

すると、為瑛矢は独り言で何か呟き始める。

その間にも足音は近付いてきて、やがて橋廊の角から二人の男が紗无達の前に現われた。

もちろんその男二人には、紗无達の姿は見えていない。

そして、その男二人は紗无達が丁度今入ろうとしていた部屋の前で立ち止まった。

「又^{また}牙様、よろしいでしょうか」

「……」

紗无はその男二人の内の一人から出た名前に、天地が逆さまになるかというほど驚いた。

そして、為瑛矢の方に振り返って尋ねる。

「為瑛……矢？ その、又^{また}牙って……」

為瑛矢はその問いが自分に掛けられたと同時に独り言を中断し、そ

して紗无に言った。

「ああ、前にも言っただろう？　紗无のよく知っている者だと」

「で、でも、なんで叉牙が、過去の與咲風のお屋敷に……」

紗无が困惑している内に、その部屋からよく知っているあの声が返ってきた。

「何かあったのか？」

そして、部屋の襖障子ふすましょうじが開き、紗无はその姿を見た。

紗无が見たその姿は、紗无が知っている叉牙よりは少し歳が低く見えたと、確かに見知っている人物であった。

よく見ると、いつも付けていた右目の包帯は外されており、そこには左目と同じ綺麗な黒に近い藍を散らした瞳が見受けられた。

「叉牙様、事態が急変しました。すぐに幽冥門ゆうめいきょうまでお出で下さい」それを聞いた叉牙は、一瞬目を細め、頷いた。

「分かった。すぐに向かう」

紗无は啞然としながらそのやり取りを聞いていたが、突然爲瑳矢に腕を引かれたことで我に返った。

「紗无、急ぐぞ。あの男達が言っていた場所は地下にある。先に《あれ》の様子を見せてやろうと思っていたのだが、今は時間がない」それだけを早口で言うや、爲瑳矢は紗无の手を引いた。

だが、紗无はその場に立ったまま動かない。

そして、紗无は言った。

「待つて。先に説明をしてよ。なんで叉牙が與咲風にいるの！？　だつて……おかしいわ。これだと時期が合わないじゃない。今私達がいるのは一年半前の與咲風。珙琅帳ほうろうちやくで叉牙が操られて闇に吞まれたのが一年前。半年の矛盾が出てくるわ。それに、私が知っている叉牙は今は十九のはずだけど、ここにいる叉牙はそれより若く見える。一年半の時間があってもおかしいわ。他にも、一年半前の叉牙の右目に何も変なところがないのに、それより以前の叉牙が何故右目を包帯で隠していたの？　理由がないじゃない」

紗无はそれだけの疑問を一気に吐き出したため、肩で息をしている。

それをなだめるように、爲瑛矢は言った。

「紗无、落ち着くんた。私は昔の紗无と《あれ》の関わりを知らない。だから、今は上手く説明はできない……。だから、ここでやるべきことをしたら、紗无の昔の話を聞かせてくれ。それで、分かるだけのことは話したい」

「勝手よ……」

紗无は呟いた。

「そんなの勝手よ！ 爲瑛矢は何かを知っているのに、いつもそれを後回しにしてすぐに話してくれようとしな。い。そんなの……勝手よ……」

紗无が最後は消え入りそうなか細い声で呟いた。

「そう……だな……。だが、紗无、分かってくれ。今は、こうするしかないのだ……」

爲瑛矢が俯き気味に暗く答える。

「……早く、行きましよう」

紗无が聞こえるか聞こえないかという小さな声で促したが、その声はすっかり爲瑛矢に届いていた。

「ありがとう……紗无」

七章 悲しい過去の扉へ黄泉へと続く道 其ノ伍 弑柱（前書き）

弑柱↓かずばしら

七章 悲しい過去の扉へ黄泉へと続く道 其ノ伍 式柱

再び爲瑳矢が前を歩きながら、屋敷の中を進んでいく。

そろそろ何回橋廊の角を曲がったか分からなくなってきた。

「紗无、疲れてはいないか？　今まであまり休んでいないし、いきなり《あれ》を見たこともある」

爲瑳矢が紗无を心配して声を掛けた。

紗无はあれから一度も声を出していない。

だから爲瑳矢はその質問に、まだ紗无が自分に憤慨しているのではないかということに対しての確認も込めて尋ねた。

すると、紗无は俯いていた顔をゆっくりと上げて答えた。

「大丈夫よ。早く行かないと駄目なんでしょう？」

そう答える紗无の顔は、いつもの優しく凜とした顔付きに戻っていた。

爲瑳矢はそのことにホツとして、紗无に言った。

「そうだな。急ごう。幽冥門まではもう少しあるが、堪えてくれ」

それを聞いた紗无は、爲瑳矢に気になったことを尋ねた。

「爲瑳矢、もうかなり歩いているけど、その幽冥門って言うのは屋敷のどの辺りにあるの？　地下っていうのは分かったけど、どこにも下へ続くような場所はないし……」

「幽冥門は屋敷の中にはない」

爲瑳矢が言った。

紗无は少し首を傾げ、続けて尋ねる。

「屋敷の中にはないって、ならどこにあるの？」

「もつと言え、この世ではないところにあるのだ。だからと言って、黄泉の世界ではない。神が御座す場所だ」

爲瑳矢の説明に、紗无は驚いて言った。

「神様がいる場所に行くの！？　でも、そんな場所にどうやって行くのよ」

「この屋敷の離れにそういった幽冥門に続くようまじないが掛けられた場所がある。そこは人が簡単に入れないように屋敷の最奥にあつて、結界などが張られている。今の私達には関係はないがな」

「へえ。でも、私にそんなことを教えてもいいの？」

紗无が爲瑳矢を心配して尋ねる。

爲瑳矢が珙琅轡の者にそのようなことを教えたとなれば、與咲風の人達が黙つてはいないだろう。

「紗无が知るためだ。後悔はしないさ」

爲瑳矢が優しく微笑んで言った。

それからまた、屋敷の角を今度は四回曲がり、やがて二人は鳥居らしきものが前方に窺えるところまで辿り着いた。

「あそこを潜くぐつたら前に社やしろが見える。そこに幽冥門に続く道がある」爲瑳矢が言つのを聞きながら、二人はその鳥居に向かって歩き続ける。

そして、二人は鳥居の前で立ち止まった。

「ここには私の父上が結界のまじないを掛けているのだが、おそらく今の私達には関係ないだろう」

そう言つて、爲瑳矢は鳥居を潜るために歩みを進める。

そして、爲瑳矢が鳥居にあと一歩ほどにまで近付いたとき、爲瑳矢は急にその歩みを止めた。

「どうしたの？」

紗无が爲瑳矢の顔を覗き込みながら尋ねる。

その立ち止まった爲瑳矢は、どこか複雑な顔付きで鳥居の柱と柱の間を見つめていた。

——何か、違和感を感じる。まさかとは思うが、父上のまじないは今の私達にも効果を示すのか？

爲瑳矢はその拭い去れない違和感を抱きながらも、恐る恐る柱と柱に挟まれた何もない空間に手を伸ばした。

すると、爲瑳矢の指が鳥居の下に來た瞬間、その指先に微量な稲光が流れ、爲瑳矢の手は弾き返された。

爲瑳矢はその弾き返された、まだ少し稲光を帯びている手を見て苦笑を浮かべる。

「まったく、父上は抜け目がないな。まさか、肉体を持たない魂だけの私達にまで効果が表れるようまじないを掛けているとは」

爲瑳矢が呟くのを聞いた紗无は「どうするの？」と言って、この鳥居をどうやって潜るのか方法を尋ねた。

その問いに爲瑳矢は微笑を浮かべながら言う。

「少し強引な方法だが、時間がないこともある。紗无、少し離れていてくれ」

紗无は頷くと、一步後ろに下がった。

「砕・崩・絶・塵・化」

爲瑳矢が一字ずつはつきりとした声で言う。

そして、最後に一言「掌」と言い放ち、手の平を鳥居の前にかざした。

——何か、近付いてくる。

紗无は直感的にそう感じた。

そして、後ろにその何かの気配を感じ取った紗无は、咄嗟に後ろを振り返った。

その瞬間、紗无の体を突風が襲う。

紗无は思わず突風から身を守るようにして手を顔の前に出した。

そして、その状態のまま爲瑳矢の方に向き直る。

微かに開けた目に爲瑳矢の姿が写った。

その直後、爲瑳矢の手の平から先程の突風のような目に見えない力が放たれる。

すると、柱と柱の間の何もなかった空間にひびが入り、その後一気にその空間が砕け散った。

鳥居の下にくつつもの半透明の欠片が散りばめられる。

爲瑳矢はそれを確認すると、紗无に向かって微笑み、一つ地面を蹴るとそれだけで紗无の横に付いた。

そして、紗无の視界から爲瑳矢の姿が消えたかと思うと、紗无の体

がふわっと宙に浮かんだ。

爲瑛矢が紗无を抱え上げたのだ。

「紗无、しっかり捉まっておいで。走るぞ」

「え！？ ど、どういうこと！？」

紗无が訳が分からず狼狽うろたえているのを余所に、爲瑛矢は紗无を抱えたまま、また一つ地面を蹴ると鳥居の下を潜った。

紗无は微かに目を開けて、自分を抱えている爲瑛矢を見た。

風が顔に押し付けるように当たってくるため、わずかにしか目を開けられない。

風音がすぐ傍で何かの唸り声のように鳴り響いている。

そして、紗无の瞳に映った爲瑛矢の横顔は、苦しいような哀しいような、そんな複雑な表情だった。

「爲瑛矢、大丈夫なの？ 重くない？」

紗无が風音に負けないよう声を大きくして爲瑛矢に呼び掛ける。

爲瑛矢はそれに反応して紗无に振り返った。いや、正確には紗无を通り越してその後ろに目をやった。

「大丈夫だ。それより、今は急ぐぞ。どうやら父上に感付かれたらしい」

そう言うと、紗无の顔に当たってくる風が一層強くなった。

そして、紗无は爲瑛矢が自分の父に知られたと思った原因が、爲瑛矢の先ほどの視線の先にあると知り、わずかに首を回してその原因を顧みた。

紗无が見たそこには、あの叉牙を呑み込んだものと同じ黒い闇が、無数の手の形をして二人のあと腕二本分くらいのところまでに近付いてきていた。

紗无はそれを見て、心臓が一つ大きく脈打つを感じた。その間にも、その無数の手は二人に刻一刻と迫ってくる。

紗无の体に冷や汗が浮かぶ。

爲瑛矢が鋭く言った。

「あそこだ！」

その瞬間、紗无の単衣ひとえにその無数の手の指先が触れた。

単衣が先の方から黒く染まっていき、足下まで伸びてくる。

「爲瑳矢、衣がっ!」

紗无は叫んだ。

すると、紗无は空中へ放り出された。

宙に浮かんでいる最中さなか、紗无は何かの中に自分が入っていくのを感じた。

それと同時に、何かが破ける音も聞こえる。

紗无はそれらの感覚が何だったのか知る由もなく、地面に柔らかく落ち、横になって倒れた。

地面に落ちた衝撃がほとんどなかったことや、落ちるまでに感じた感覚よりも先に、紗无はハツとなって爲瑳矢の姿を探した。

「爲瑳矢!」

紗无の声が周りのゴツゴツとした岩に反射してその一帯に響く。

すると、紗无の向かって卵うの方向から、小石が地面を転がる音がして、爲瑳矢が上に被っている砂ぼこりなどを払うようにしながら起き上がった。

「爲瑳矢!!」

紗无は歡喜の声に少し涙声を含ませて、爲瑳矢の下へ駆け寄った。

「爲瑳矢、良かった……。影がすぐ傍まで来てたから、私……」

紗无が涙声で言う。

そんな紗无の頭の上に爲瑳矢は静かに手を乗せて言った。

「ああ、私も危なかった。この式柱かすはしに助けられたな」

爲瑳矢が後ろを振り返って、そこに立っている二本の人のような形をした柱を見た。

「あれは……誰か人を祭っているの?」

紗无が尋ねる。

「あれは、神代の二柱ふたはしらだ。私達はそれを短く式柱と呼んでいる。その昔、まだこの葦原の中つ国、日本やこの世が生まれるそれより以前に御座した、そして、この日本国を生んだ存在ともされている、

伊邪那岐命いざなぎのみことと伊邪那美命いざなみのみことの、二神の御神体だ」

爲瑳矢が続ける。

「この二神は、ここに不浄のものが入らぬよう向かい合って結界の役目をしている。だから、あの影はあそこより中へは入ってはこれない。だが、まさか結界のすぐ手前で影に追い付かれるとは思わなかった。あのまま紗无の衣が影に染まった状態で結界に飛び込めば、私達は確実に弾き返されていた」

紗无はそれを聞いて思い出したように染まっていた衣の先を見た。するとそこには、ちょうど影で染まっていたはずの足下から先までの衣が手で引きちぎられたように破けていた。

「悪い。衣が台無しだな。だが、今はこうするしかなかったのだ」そう言うと、爲瑳矢は結界の方を指差した。

爲瑳矢の指差した方向には、何か黒いモノが蠢こもいている。

それは、よく見ると紗无の破けた衣で、あの追い掛けてきていた影がその衣を呑み込むまさにその時であった。

そして、それはほんのわずかに結界より外側で蠢こもいていたのであった。

蠢こもいている影はその衣を完全に呑み込むと、こちらへ少しずつ移動してくる。

だが、式柱の間を通ろうとした瞬間、その影は何かに弾かれたように細かな塵となって消え失せた。

その光景を見ていた紗无は、もし爲瑳矢が自分の衣を破っていなかったら、という考えがスツと脳裏に浮かんできて、嫌な寒気を感じ、身震いした。

「神の持つ力は強大だ。それゆえに、神はこの世のあらゆる数多あまたの現象を知り、あの世のあらゆる現象を知る。そして神は、博識であることを無駄にはしていないと知っているために、この世の自然と現象の均衡を保って下さっている」

爲瑳矢がいきなり話しだしたその話に、紗无は何かを尋ね返すということはできなかった。

それは、紗无がその話を最後まで聞くことには、今から見ることになる爲瑳矢の過去と與咲凧のことに、何かとても関係があるのではないかという思いが頭を掠めたからなのかもしれない。

だが、真にその話を遮ってはいけないと思ったのは、爲瑳矢がそうさせてはいけないと思わせるほどに、哀しい影を、その顔に浮かべていたからであった。

「それに対して人は、この世の現象を手にとまるほどにしか知らない。いや、それ以上知ってはいけないのかもしれない。そして、無知なために、たくさんの人の中には、過った道を進む者もいる」
爲瑳矢はそこまで言うのと、話すのをやめた。

紗无はその話の続きが気になったが、あえて爲瑳矢に問うということとはしなかった。

話の最後へ続くモノが、この先にあると思ったから。

七章 悲しい過去の扉へ黄泉へと続く道 其ノ陸 双晴（前書き）

双晴↓そつせい

七章 悲しい過去の扉へ黄泉へと続く道 其ノ陸 双晴

二人の前には、洞穴のようにぽっかりと開いた大きな穴が一つ。まるで、井戸の底にある闇をそのまま掬い上げてきたような真の暗闇。

それを呆然と見ている紗无の手を、爲瑳矢が引いた。

「行こう」

紗无は固唾を呑み、一度深呼吸をしてゆっくりと頷いた。

紗无の目の前に、暗い闇が近付いてくる。

この時確かに、恐怖という目に見えないモノが胸の中を取り巻いていることに、紗无自身気が付いていた。

だが、紗无のその感情は決して外に出ることはなく、むしろ、好奇という感情の方が今の紗无には多く存在していた。

やがて、二人の姿を完全な闇が包み込み、もはや自分の手さえ本当にそこにあるのかどうか不安になってくるほどであった。

——でも確かに、爲瑳矢が手を引いてくれているのを感じる。

それを感じることができるだけで、紗无には心強かった。

何度か右に左に曲がった気はするが、いまいち闇の中にいるためか、それが確信と言えるほどに断言することはできなかった。

紗无が今分かることは、確実に前進しているということだけであった。

爲瑳矢は闇の中に入ってから、一度も口を開かなかったのだが、この時になって初めて、口を開いた。

「紗无、目をお開き」

紗无はその言葉を聞くまで、自分が目を閉じていたことに全く気が付かなかった。

闇の中に長い時間いたためか、自分がいつから視覚を捨て、触覚を頼りに行動していたのかもはっきりとは分からない。

そして、久しいと思うほどに、紗无の瞳に光が照らしだされ、紗无

の心に少しだけ、安堵の心が広がった。
だが、紗无の心がその安堵で完全に満たされるということとはなかった。

目を開けた紗无の瞳に最初に映った光景は、円になるように灯台が並べられ、その中心に佇む、なんとも美しい大きな一羽の鳥であった。

よく見ると、その美しい鳥の前に三つの人影が見える。

「紗无、ここからではよく見えないだろう。もう少し、近付こう」
爲瑳矢が険しい顔で言った。

爲瑳矢にとって、この場所は決して良い気持ちで居られる場所ではないのだ。

そう考えると、紗无の表情にもスツと影が落ちた。

だが、ずっとそんなことを考えているわけにもいかない。

紗无は、その暗い思いをグツと胸の内に押さえ込み、しっかりと前を見据えた。

——双晴そうせい、これで良からう。この者の命と引き換えに、予よにその強大な力を貸し与えるのだ。

近付くと、歳を重ねているとすぐに分かるしわがれた男の声が聞こえてきた。

その男の隣には、まだ十に満たないと思われる子供が一人。その隣には、與咲風よなづかの屋敷で見た又牙の姿があった。

双晴と呼ばれたのは、おそらくあの美しい鳥のことだろう。

——汝はなぜ、それほどまでに力を欲す。汝の内孫であろう。その小童は。

双晴が男に向かって問うた。その声は、姿同様、とても美しい声音であった。

そして、紗无は双晴の言った言葉を聞いて、ハッと爲瑳矢を顧みた。あの少年が、爲瑳矢なのだ。そして、簡単に自分の孫である爲瑳矢を、人身供犠じんしんくぎとして捧げようとしている、あれが與咲風の当主。

つまり、お祖父様の……仇。

再び、與嵯風当主の声が響く。

——理由……か。

そして、少しの間が空く。

いくらか時間が経ち、紗无が待ち切れなくなって詰めていた息を吐き出した時、当主の低い声が響いた。

——願いのためだ。何を置いても叶えたと決めた、願いのな。

その答えに、双晴は言う。

——汝の願いは、決して叶わぬ願い。神にすら許されぬ願いだ。汝が今から何をしようとしているかは、おおよそ想像はできる。それをすれば、失うものはあっても、得るものなど何もないぞ。

——くどい。早く予に力を貸すのだ。

当主の、静かだが、相手に抵抗を許さぬ声が響く。

それに、双晴は一度瞼を閉じ、再びその瞼を開いた。その目には、二つの瞳が光り輝いていた。

——それが、書物に記してあった、真の瞳、二ノ瞳……か。

当主が、光り輝く合計四つの瞳を見ながら呟く。

だが、双晴はその問いに答えることなく、幼い爲瑳矢にその四つの瞳を向けた。

——哀しき小童よ……汝に良き前途を願う。

幼い爲瑳矢は、初めはその大きな体躯と光り輝く瞳に怯えていたが、その優しい声を聞いて、今にも泣き出しそうな顔を緩ませた。

この時の爲瑳矢は、今自分がどのような状況にさらされているのか、考えることすらできないのだろう。

双晴はそれだけ言うと、子供の爲瑳矢から視線を反らし、当主に向き直った。

——やはり、ヒトという生き物は、愚かだ。そのような者に力を貸す私も、また愚か。この責は、私が負おう。

そう言うと、双晴の瞳が金から銀へと変わり、より一層輝きを増した。

まばゆい光がその洞窟内を神々しく包み込む。
いきなりの出来事に、紗无は思わず目を瞑る。

「紗无、よく見ておくんだ」

爲瑤矢の言葉に、紗无は額に手を当て、陰を作りながらゆっくりと目を開いた。

それでも、その光が眩しくて、なかなか状況が分からない。

すると、三人と一羽がいた方から、不思議な音が聞こえてきた。

なんとも言えない、鈴の爽やかな音に、篠笛しのぶえのような細い音色が重なった、そんな不思議な音だった。

「これは、双睛の鳴き声だ。我が子の通過儀礼の際、この声を聞かせて、自分の力のほとんどを分け与えると書物で読んだことがある。その鳴き声は、古き世のある国で、南の地を守護していた朱雀という四神に酷似していると言う。また、朱雀の別名である、風の力を司っていた鳳凰にも、力を分け与えられたという話もある」

爲瑤矢が双睛について語っている間に、光が少しずつ引いてきた。そして、うつすらと目に写った光景に、紗无が何か異様なものを感じた瞬間だった。

「爲瑤矢、下がるんだ！」

突然、叉牙の大きな声が響き渡り、それに続き、はっきりとした祝詞が聞こえてきた。

「御神に捧ぐこの人身供犠に代わりしものとして、我が眼まなこ、その贅にえとし、御神に与えること願わん。我が呪力の一切を、御下に奉る」
祝詞を唱えた叉牙の姿が、幼い爲瑤矢を後ろにかばうようにして立っている。

それは、やっと視界がはっきりしてきた紗无の目に、最初に写った光景であった。

そして、その叉牙に異変が起きたのは、叉牙が紗无の目にはっきりと写って直後のことだった。

それは恐ろしい光景だった。

叉牙の右目から、どろつとした液状の黒い影が這い出してきた、その影が、一瞬空気を取り込んだように膨らんだかと思うと、瞬く間に砂塵と化して風に流れていった。

「う……」

叉牙が唸り声を上げ、右目を手で押さえている。

紗无は、ただそれを呆然と見ていることしかできない。

そして、叉牙が手を目から離れたそこには、すでにあの美しい藍色の瞳は存在しなかった。

その目は空洞のようで、どこまでも続いている闇を思わせた。

「貴様、邪魔立てするか！ この愚か者」

当主の声が響き渡る。

これが自分の仲間に言う言葉なのか。

紗无は、不意に激しい怒りを覚えた。

——なんとということを……。私にはもうこの儀を止めることはできぬ。

双睛の悲痛な声が聞こえてきた。

それを聞いた紗无は、反射的に叉牙の後ろにいる爲瑛矢の姿を見た。幼い爲瑛矢は地面にうずくまり、体を震わせている。

だが、紗无はそれより先に、幼い爲瑛矢の姿が透けているのに気付いた。

叉牙も双睛の声の意図を知り、うずくまっている爲瑛矢を振り返る。だが、その姿はどんどん薄くなっていき、やがて背景と同化してしまつたかのようにその場から跡形もなく消えた。

「くそ！ なぜ爲瑛矢が消えなくてはならない」

叉牙が地面に拳を叩きつける。

その手から赤い血が滲み出し、地面に滴り落ちた。

「無謀を犯した者は必要ない。連れていけ」

当主がそう言つと、どこから現れたのか、数人の手下らしき人間が叉牙の周りを取り囲み、拘束した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3778f/>

白紙の物語

2010年10月11日05時17分発行